



共同三盟舎出版

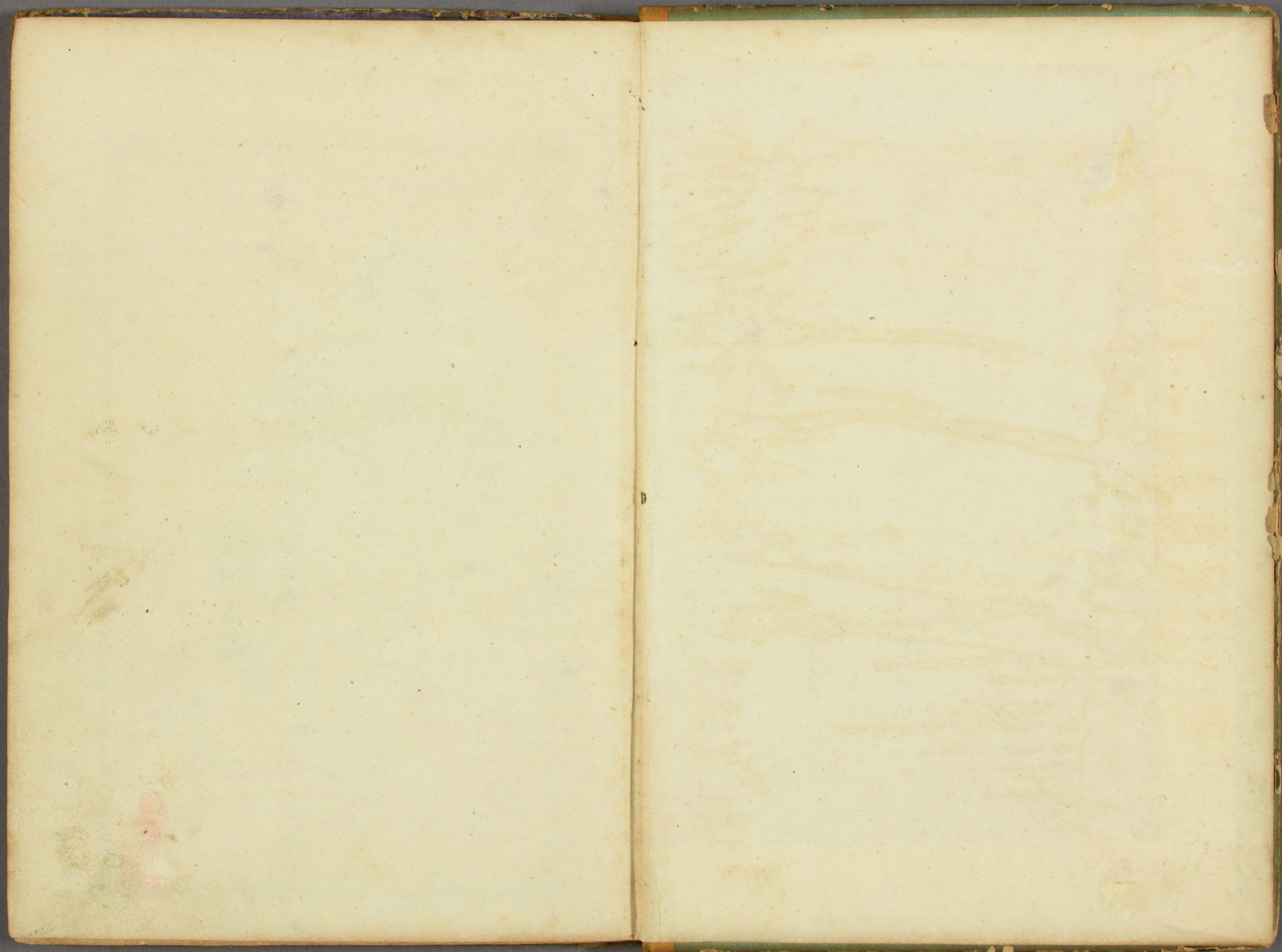
芳草花園
春之曙

花の舎狂風著











子 静 田 村 氏 環 野 嶋

人園より一学科の志とある者のに於て小説の學理の意射とある者なり然らば又多し人年ハ漸く小説の體と重なりたる者か此とも交渉の情理に於ける未だ深奥を究め及んで一編と成るを去るは學問の後にむに足らむと是れは是れハ之を建論者の言なり存するものあり主人敢て學問と文學をこれとも凡そ書と傳へ流るるを急を採ると後者幸に以て偶々この存するや又眼をせらるるありハ未だ主人敢て此を以て

究め及の二者を的せむに及ぶは是れ於て亦主人ハ他ハ序跋とある事知解と装に目より記し其期ハ序と

小説の流るるの
是れ其ある日

花の舎主人識

花^芳草 春 廻 曙 目 次

- 第一章 少女意と異す新紙の評
- 第二章 演説志と起す教育の道
- 第三章 艶曲心と淫を清元の門
- 第四章 壯士談を和す根岸の菴
- 第五章 從學譽を博す一章の論
- 第六章 榮華掌を翻す露命の苦
- 第七章 惡縁契を絆す三筋の糸
- 第八章 奇遇交と約す新年の宴
- 第九章 説話感と催す梅花の妍
- 第十章 春戀情と惱す觀櫻の會

第十一章 頌歌感を漏す佛史の状

第十二章 新紙人を歎す繫獄の報

第十三章 才子思を議す鉄窓の下

第十四章 佳人任を聽す新紙の務

第十五章 晴寃志と慰す歐米の花

目次 畢

花芳草 春 廻 曙

花の舎 狂風 述

第一章 (少女意を異す新紙の評)上

チリン々々々チリン 繪入扶桑し新聞

静「お花サン々々々々此頃の繪入扶桑の大層評判が良いとて皆様の處でお購讀で御坐り
ますね 花「道理で隣家の姉サンもお言でござりました繪入扶桑に讀物の面白のが御坐
りますとさお静サンあら向へ賣りに來たで御坐ります早速買て見ましよ 静「イヤ左様
で御坐いますか 花「新聞やサン々々々々一枚賣却さいな 新聞賣子「ハイ壹錢五厘です有
難う

ト云ひつゝ立て繪入扶桑し新聞チリン々々々チリン

花「お静サンお早く二三頁を御覽なさいこれこの續物が大變面白んで御坐りますと

さ、マ一眞個ほんご又良よい繪えが書かいて在あること御覽ごらんなさいませ好男子よいをとこでとこと、こんな好男子よいをとこ又
と有あるものでしょう年恰好としかつこうの新駒しんこまや又似にて顔付かほつきの高島たかしまや又松島まつしまや又川崎かわさきやとをつきま
せられた様ようですの私わたしはへこう云いふ男子をとこと好すくんですヨほんとは好男子よいをとこ

ト話説はなしながら一心不亂しきり又見みて居あるお花はなをお静しづいもどかしく思おもひ

静しづ「お花サンへ、マ一ね惚情のろけで御坐ございますかいいやなこと先づ夫れあとの御樂たのしみとしてこ
つちから讀よみましての如何どうで御坐ございますか花「ハイ夫れそが宜よう御ございますれのお閱讀よみ被ま下
ませ私わたしはへ聞き申ましよ静しづ「左様さやうなら之れこか又閱讀よみしようかお花サン之れこの見出みだし
の虎刺拉コレラですの聞き申ましよ横濱よこはまのだん／＼コレラはやりが流行はやりまして毎日四五十人宛死まいにちひやうごふしにま
すこと誠まこと又怖こはいことだから養生やうじやうとやらとせよバなりませんね花「お静サン其次そのつぎの何なんで
御座ござりますか静しづ「次項つぎの見出みだしは惠金めぐみです之れこの世よの薄命うしあはせの者ものよお金かねを惠めぐみ投なられたの
で御坐ござります慈悲じひ深ひい方かたもあるものですね花「其次項そのつぎのなんですよ静しづ「これですか之れ

の演説會えんせつくわいでその花「皆みなんなが演説會えんせつくわい々々々とお云いひですが演説會えんせつくわいの何なんんでしよ静しづ「お
花サンとしたことが、マ一演説會えんせつくわいの何なんんでしよどのいやなことよ夫れその然そうと讀よみま
しょうから聞きなさいませ

今日午後一時こんにちごより淺草井生村樓あさくさゐむらうに於おいて開ひらかる、教育演説會けいよくえんせつくわいの出席辨士しつせきべんし並ならびに演題えんたいの自由
教育と干渉かんじやう教育何れか可かなるや(松田三郎氏まつださんじ)俗曲改良論しやくきよくかいりやうろん(島野環氏しまのたまき)として傍聽ばうてい無料

花「チャ／＼その井生村ゐむらに在あるので御坐ござりますか静しづ「左様さやうで御ございますお花サン今いまから
往ゆて聞き申まししようか花「もう遅刻おそくの御坐ござりませんでししようか静しづ「何時なんときでしよ

ト柱時計はしらどけいと音がむれば折をしもチン々々チント三ツみつの音ね

マ一早はやいこと三時さんじで御坐ござります眞個ほんご又此これ長い日ひも遊あそんで居をますと時間じかんの經過たつの判別わかり
ませんこと演説會えんせつくわいの開始かいしましますの、一時いちじよりと書かいて御坐ござりますれのお余よつ程ほど遅おそう御
坐ごりますね併しかしまだ皆みなんな濟すみの致いたしますまいからお花サン宜ようございますれのお同どう伴ばん

又傍聴も参りましよ花「そんなら往きましよ

ト二女の疾く々々衣紋つくり帯締直し互に話説しながら井生村指して行きよけりそも此の二女の清元のほうばい弟子よてお静が年の十六夜の月の眉花羞かしき俏姿花の年の十五よて胡蝶の花よくるふなる風情とて何れも優り劣らざる姿美艶き阿嬢よもお花の少しく水性らしきぞ自から言葉よ現れ知られたり

第一章 (少女意を異す新紙の評)中

然しもよ廣場き井生村樓も今日や教育演説會の催しありとて我れ聴かばやと人々の正午より詰掛け一時前よの早や充ち満ちてさながら立錐の地もあさ程にて場所が人や人が場所やら分ちも附かざる傍聴人おの八字髻を捻りながら坐する官員風ありと見れば前垂掛けし商人あり三尺帯の職人体のあぐらとかくあれは袴を着けし教師あり飛白の着物よへコ帯締し書生の腕又くあれは外見着飾れる紳士あり西洋束髪あれは日本結びの婦女子ありそも區

々の人々も心の一ツ演説を聞かんものをと只時間の到れるれみと待ち居れる折しも一時の報あれは辨士の控所より徐かよ羽織袴よ禮儀正しく出来れば傍聴人の柏手のなりも止まずよ井生村樓もくするよばかりと疑はれたり辨士の正面よ飾り付ある卓子よ向つて先づ水呑の水を飲み一聲諸君と呼ぶや否今よで囂々として騒がしき聲も立消へ寂寥と無音に姿人なきかと思はれたるより辨士の引續いて今日諸君よ對て演説致しまするの自由教育と干涉教育何れか可なるやと云ひる演題で坐りますと辨士出したるより迄て其辨士の松田三郎氏たることよ知られたり松田氏の喋々と干涉教育の弊害を揚げ自由教育の利益を論じ其辨流るよが如く聴衆をして感動を發せしめヒヤ／＼の聲と共に説き盡して演壇を下られし間も無く代り出られし辨士の即ち島野環氏よして松田と同じく羽織袴の装嚴然と演壇ふ上られて拍掌の音響止むを待ち説き出されたるの俗曲改良論にして清肅の辨説て曰く

辨士島野「云々音曲の人心をして感動振作する既よ佛國のナポレチンも云へし言あり歌

曲音樂の人の性情は大いなる感化と興し人心に非常の勢力を及ぼすもの音樂の如く甚だしきいなし名家の作は係る道徳上の歌曲の深く人心を感動せしむること道徳を論ずる書の唯智力は訴ふるもの、比はあらざるなりと斯の如く感化の力大へあるものなれば若し其音曲よして淫猥野卑なれに従つて人情の淫猥野卑は流るゝや當然の事なり

静「花サンあれ演説の聲が聞こへまゝとるで坐せんか早く参りましてお一言でも多くお聞もうしましよ花「お静サン余まりいそぬだもんでしたから汗が出て身体がひッしよりよなりましたですア、草臥たチヤ茲が井生村の入口で坐りますか下足番「お二女さん一緒ですか下足札お持ちなさりませ

静花「ハイ

ト云ひつゝお静の下足札を持ちながら二女うち伴れ場内へ入らんとして共大へ驚けり

第一章 (少女意を異す新紙の評)下

お静れ花の兩人の場内へ入らんとして斯くも數多の人々がうち集へられしことなりと思ひづ爰へ来て見ればろが傍聴人の押し合ふばかりの有様なるよりして共に驚き容易に安坐せとの出來ざるよりはづかし相立居ながら切り演説を聞きとりしもいま中途より聴初めしことなれば辨士の誰が人なるか又演題の如何なることか解からざるよりして

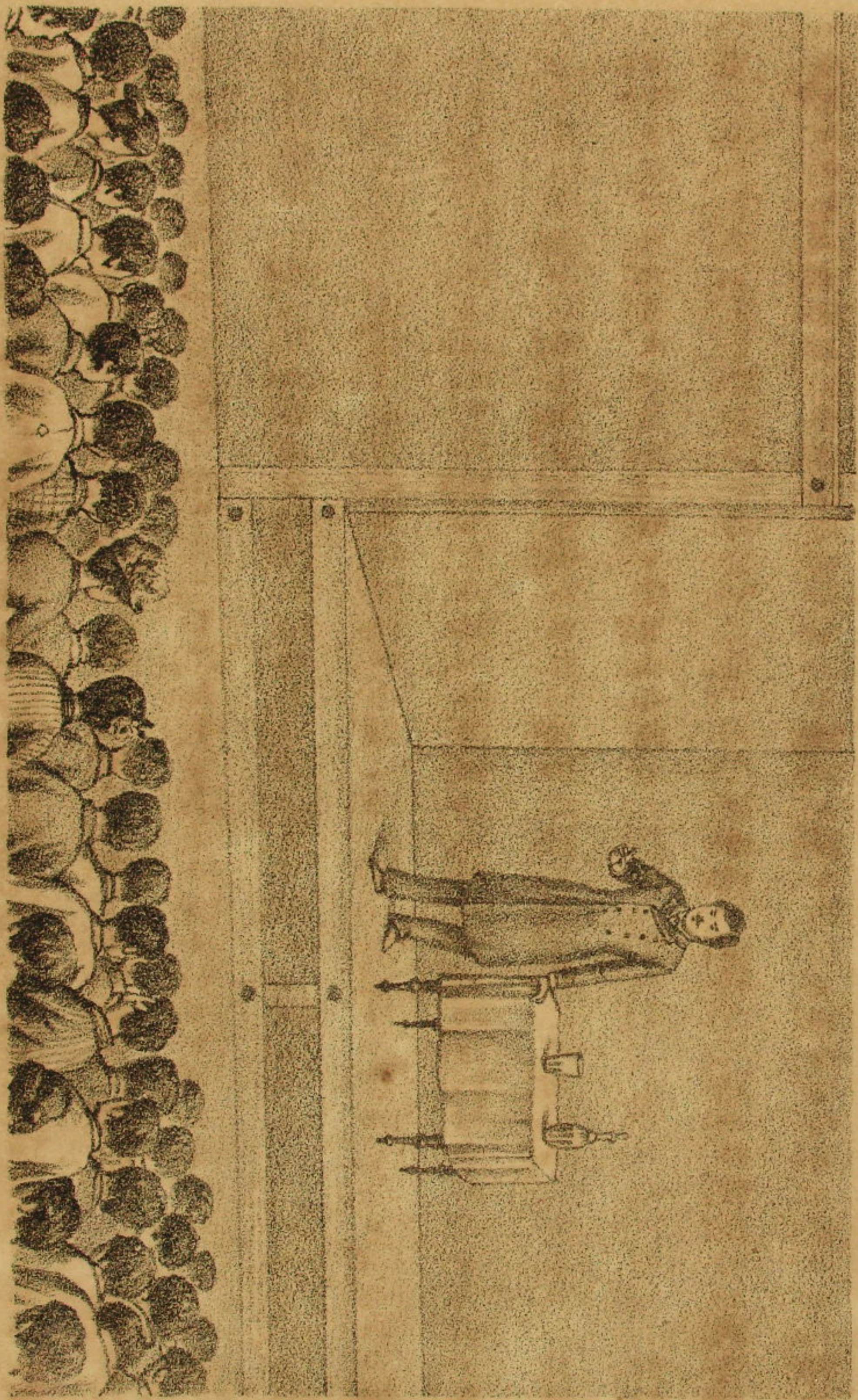
静「誠に恐入まするか只今演説なすておいでをさいまするか方何誰で坐いますか傍人「那のお方の島野さんです静「左様で坐りますか有りがたうござりますそれな俗曲改良とかのれ話して御坐りまして傍人「どうです静「花サン俗曲改良とやらのれはなしで坐いますと充分お聞き申ましょね花「ほんとに多數の人で逆上る様ですハト低き言音は話しながら聴居れば辨士島野氏の前より引續き説かれて

辨士島野「然るに我國今日尙流行るゝ處は音曲の大概淫猥野卑の文句ならざるはなし見られよ彼の清元常盤津と云ひ其他何の流義を問はず男女の痴情言ふは堪へず聞くは忍び

ざるもの、み云々然り斯の如き淫猥野卑たる音曲の國は流行れ、蓋し道徳を害する又大へならん然るゝ世の親たる者心志未だ固からざる年少の子女をして此の音曲を習はしむとの噫誤てる哉其親たる者何と以て女子に完全の教育を與へて斯の如きの音曲を習はしむるか之れ今日まで一般の風習また止を得ざるか然りと雖も今にして之の惡慣習を改良せざれば後來益々道徳を毀損する敢て疑ひを要せざるなり云々

ト島野氏の滔々たる辨説を以て俗曲改良論を盡し檀を下られ閉場の告知と共に傍聴人の動搖々々と我れ前さゝ出んとて押しをされつ木戸口へ下足の番號を呼べと叫べと下足番の順を逐ふてハイ梅の五番と駒下駄と出せられ松の十番と履を出して傍聴人を追々歸やせし様いさながら大洪水のひくが如くに思はれたり

花「モ皆んなお歸りになりましたからお静サン、ドラ歸りましよ静「ナヤ數多のお人も何の間おやらお歸りになりましたねそんなら静かお歸りましよ去の左様とお花サン島野サ



圖之説演機村生井於環野曉

ンのね話しのお聞きよありましたか 花「私ヒの人さんのお顔ばかり見て居たもので汚坐
りましたから話しお聞きよありませんでしたお静さんあなのお聞きで汚坐りましたか 静

いやなことお花さん人に見え来たんで汚坐りませんですハ

ト云いつゝ木戸口へ出でお静の下足札を差出せば

下足番「ハイ竹は八番

トよばりながら駒下駄二足を直し置けり

静花「誠に濟ません

ト答へつゝあして二女の手を握り我家を指して歸りける

第二章 (演説志を起す教育の道)上

茲に淺草瓦町人車や馬車に往來途絶ぬ繁佳の地大阪屋と云ひる両替商營業最とて手堅き主
人長三郎の男女七八人も雇遣へ店の若衆子僧等の主人の指圖に皆勞働怠ることゝてあら

ざるより益々商業繁昌しをのづと金融も良しけるこの長三郎が妻のお安の其中は獨り娘のお静とて蝶よ花よと育て上げ可愛々々も早や十六歳となりけるが夫婦のお静の未だ年累ぞるその内よりすゝめて學校へ通ひせ勉強させればお静も性質の伶俐は日々學校へ往き一心不亂は勉強し今でハ學科も余程上達し新聞紙上の論説も少々解得かけしを楽しく

安「今日のお静は何処へ往つたことやら正午よりまだ一度も戻らざるノ如何しふことだろうね初や下女初」お嬢さん今日正午は學校より歸宅となりましてから飯をおわがりなさいまして速にお花サンの處へ遊びいらつしやつた様子で滂坐りました安「左様かノ夫れよしてもモ今頃歸へらよやならぬ筈だが時刻も五時を少々廻りたれば左様か又行く時だのよ夫れともお花サンの處へ遊びへ行つたと云ふなら花サンと一緒は左様か又往つたことかも知れん併し初や面倒じやが一寸お花サンの家迄尋ねよ往ておくれんか」初「ハイお聞もうしよ參りましょ

ト下婢のお初ハ女房お安の言付は應へ花の宅へお静を尋ねよ行かんとして表へ出づる出合頭お静ハ戻り歸りしより

初「お嬢さん大層お母さんがお家事で坐りますよ私しは只今あなたさまをお尋ねよ參らふと存まして表へ出ました處調度お歸りよなりまして、マよろしゆう滂坐りました静」左様かねお母さんへ御心配を掛けて濟ませんの初や滂苦勞じやつたノ

ト二人談しあから家内へ入れハ母のお安ハ飛で出で安「お静マ何様したのお母さんの大變心配したよ、マ歸宅てよかつた初やお世話であつた静」お母さん誠にお心配を掛けまして恐れ入ります今日お花サンの處へ遊びよ參りました新聞と讀みましたら井生村ハ演説が滂坐りますとの事でしたからお花サンと滂同伴よ聞きよ行きまして只今濟ました故戻りが遅くなりましたので滂坐りました安「左様な宜かつたが如何した事と案事たので初は今お花サンのとて迄お聞申しやりかけた處であ

つた先つ安心夫れの左様と演説とやらに聴いて解得かね 静「ハイ少々参りました時刻が遅うは坐りました故皆の解得ませんでしたでしたが余程心は感じ思ひ當りました事か坐りました 安「これから何處あり外へ行くときよ一寸左様言ふてお出よ夕飯が出来て居れば
お喫食

ト何か何迄心配れる有がたき實は子と思ふ親心半日見ざれば千日も逢ぬ思ひの母は安
談話を余處よかはり草吸へつゝ下婢のお初は世間話しを仕掛けたり

第二章 (演説志を起す教育の道中)

母のお安と下婢お初と世間話しをなし居る折から

静「お母サン只今夕飯を済まして 安「こゝへ来て少しお休み左様してお店へ往てお父さん
よ歸りましたことを云ふてお出 静「ハイ

ト答へつ店へ往き親父長三郎お打向へ

静「お父サン戻りが大層遅くなりまして 長「大層遅かつたノ 安「お静や〜 初「お嬢サンお

奥でお呼びなさへます 静「初やお母さんかへ

ト云へつゝ奥座敷へ入れバ母のお安の周章しく

安「お前の今日お稽古は往かなかつたね 静「ハイお母サン今日の往きませんでした左様し

て三味線はお稽古はモ往きますまいと思ひまして 安「何ぞ、モ往かないの何もの私し達

が止めるよお前の好きは往くのを今日お夫は引替へお前が止どいさて此好天氣も雨よ

ならなければ宜いがノウお静お友達と喧嘩でも仕たのか 静「エ、そんな事のは座いませ

ん 安「左様でなければお稽古の嫌ひはなかりか 静「エ、 安「なんだか變だノウ併し往かな

いのなら一寸お師匠さんへ其事と斷り申して置うか 静「左様で座ります一寸お斷り

申して置ます方が宜しゆう座へましよね 安「そうあら明日初はお師匠さんの處へ斷

り言ふよ往てもらう又お稽古は往きたくなつたら往くが宜い

ト笑つゝ母のね安の談話のすれを今日のお静の何んだか變だと心も思ひ夫れと口より出さぬど案事ながら其日も暮れて十時頃各々臥床に就きければお静の一人寐ぬといなし今日聴取りし演説の余程心も感ぜしう、いま尙耳朶も其聲の聞ゆる様も想ひれて胸も掌を當て熟々案へ演説の中は清元常盤津等の如き我國も流行るゝ歌曲の大概淫猥野卑と云われしが實もや日頃三味線のお稽古も清元を習へるその文句もいにお染久松とかお半長右衛門だとか男女の戀中の遂に情死する様な事のみよて淫猥きやら野卑やら眞實も思ひば正氣で言ふことの恥づべきものばかりいつぞやもお母さんが清元や常盤津等の止せとお云ひてあつたのを無理にお願申して清元を習いかけしも今日となれば初めもお母さんのお言葉もまたがへをりましたれば宜かつた事によしなきことをしてけりと悔み悟りを開らさし其甲斐も島野さんの演説と聴しお庇蔭でありました今日尙演説とお聴もうさずい何日まで清元と習ふて無益な時間を費やそことやら知らざりしア、演説の聴くべきもの夫れに附けても新聞もけつこうな物で今日新聞と讀ずば又演説のある事をも知らざることゝ更行く時も丑みつ頃枕も響く淺草の鐘も驚き覺めぬればこれあん南柯の夢なりし

第二章 (演説志を起す教育の道)下

蘭燈影暗うして庭の千草も啣くなる虫の音も何となふ心さびしく聞きなされ四邊と視れの朦朧と今なる鐘に破られし夢も總身のびつしよりと冷汗かきしを拭きながらお静のハット呼吸を着きア、今日演説の余りお心も感ぜしより思ひの凝て夢となりしかア、苦なかりしと一人言つゝ疲れも又も寐むりて空明け渡るとも知らざりけり

安「お静や早や六時よなればお起

ト呼び起されてお静の驚き目を覺し衣服を着替立ち出で、白齒磨ける花王散顔洗ひたる清水もて髪のおくれ毛搔き上げつゝ鏡も向へ梳り容貌正して父と母とよ打向へお早う座りまずと禮を述べ己のが學校に用意をば調へ居る其内よ

「ハイ其師匠が出来ましたる習はせよおやり下さい併しお母サン三味線の習いなくつても世間の交際へ出来ずでしよね 安「左様ども三味線位はほんよ一時の快樂ばかりだよ 静「世間の交際よそろ三味線か必要で御坐んせんけれの寧の事私しの三味線のお替古の止しませしよ

トお静の一場の演説を聴しより心よ最と感來て習ひかゝりし清元と止そのみか好きな三筋の糸よ思と斷ちしぞ賢けり

第三章 (艶曲心を淫す清元の門上)

東よ筑波西よ富士中を貫く墨田川流れて茲に宮戸川宮戸の渡し駒形の裏新道よ一格子に葉越の松延喜の紋の軒燭燈内やゆるしき家造り三筋の糸よ浮艸の音色も聲も清元の延登代と呼ぶ師匠あり今しも替古の間と見は獨り火鉢よ身を依せて讀さ玄置たる人情本を手に把りて二枚三枚小聲よて讀初めし間もなく

花「お師匠サン今日ハ

ト云へつゝ格子戸がらりと開けて入り來る容体と師匠の見るよりも

延「お花チャンでそかサアこちらに今日ハ早くお一人でお静チャンの何様なされまし

た花「今日ハ何日より少々早う坐りなされたが外よ用事が汚坐りましたもんでしたから

お静サンのお誘へ申ませずに参りました 延「左様でしたかそんなら直まお替古よいたし

ましよかね

ト烟草くゆらし話す中お花の三味線取り出し根じゆも高く調子を直し清元本と前よ置き

花「お師匠サン今日ハ千鳥玉川とお習ひもうそれで坐りますね 延「左様でした

ト延登代ハ三味線手よ持ち坐よ直り聲も冷しく爽かよ唄ふ文句も千どり心に狂ふ戀お花のこれを習ひ終りて三味線の根を緩め仕舞しを延登代見つゝ花よ對へ「こちらへと云へつゝ二人ハ火鉢を中よ指し向へ噂しを仕初し

延 「今日の静チャンのお休みをさるかしらん何日今頃のお出なる時だよ未だお出よ
 ならないからネーお花チャン花「左様でよ今日の静サンは何様なさつたんでしよ何處
 へいらつしやたらしらん時よお師匠サン昨日私とお静サンと二人でね井生村へ演説と
 やらと聞きよ参りました處か清元や盤常津の何様とかお話しが有ましたがお静サンのお
 解得よなつたと見えて切りよ聽てお出でしたか私しはや一切不解得もんでしたから退屈
 まぎれよ數多聽よお出なさいました人々と彼方見此方見ましついで思はず後へ振り向きま
 したら眞實よネー夫れ社を色の白い美麗しきやさ姿年の位の廿二三で米屋町風体のお方
 がお出でしたから喫驚私しの一目見るよりも今習ひままた玉川の文句じやござんせんが
 振りかたげたる笹の葉の一夜の契ゆかしやとぞつと身よむ色戀よ心の駒の止めりね
 縁を繼ぎの井生村でこんなお方と末の末まで一緒よもど今尙其方のお容体が目の前よち
 ら附く様で御坐りますお師匠サン何様してあんな好男子のあるんでまよそれい〜新駒
 やも及ばない様でした

トお花が一人辨りなから傍へよ置たる茶を呑みつ咽喉のかわきと滋したり

第三章 (艶曲心を淫す清元の門)中

お花が年ふも似やらぬ辨りかた早や戀心よ意氣事の話しも聽役師匠の延登代船を取りどり
 延 「チャ〜お花チャンそれは宜がつた子ト左様して其男子よ何んどかお言えでし〜う
 花「お師匠サン一寸言葉と掛けましよかと思ひましたがね余り嬉しいやら恥かしいやら
 で胸の動き〜波立まして言など思ひ口まで出ましたがつい言えませんでした延「ささ
 の男子も何んとかあなたよ言葉でも掛けさうあもんですネー花「エ、言葉のお掛けあさ
 らんでしたが只私しの顔をじつと望めてお出でしたです延「其男子も余りですねお花チ
 ヤンが夫れ程思ひなされたお心根と酌斗すよ只顔のみ見て居ましたとい花「お師匠サ
 ン數多の中ですもれ幾ら云はとお思ひなされましてもそれやいけますまい併し目も口は

と物云ふとやうでい座りませんか 延 「チャ大變じやお花チャン少つと涉馳走でもしてお談話なさいましお聞き手がつろろろ涉坐りますわ 花 「マー談話も身が入りましてとんでもない長くなりましたたどろ歸りまじよ誠に失禮でい座りました 延 「何んのマーたまにや少つと位長くなりましたつてお家でい何よもお云でいござんすまい 花 「何んの申まじよか 延 「そんなら宜いじやい座んせんか今お茶を入れ替へました處です涉馳走と云ふてい座んせんがほんの一ツですがおつまを成さませ 花 「ハイ有がとう何日でも涉馳走様になりまして濟ませんこと

ト二人の茶を飲み菓子を食べ種々な話しを爲し居る折から表の格子口は瓦間の大坂屋から参りましたでい座りますい面下さいと呼び聲聞き附け

延 「何誰ですかチャ大坂屋さんのですか先づこちらへ

ト延登代の言葉よついで大坂屋は下婢お初の敷居を越へて上り口の縁は手と就きしとやか

又一禮述べて

初 「家のお嬢さんの少々御用都合が御坐りまして暫らくお稽古とお休み致されませから宜敷御願ひ申ます之れい誠は籠葉で御坐りませがほんの乃志まで呈しますれいお納め下さりませ 延 「チャ〜これい有がどう御坐りませ左様してお静チャンいお稽古をお休みなさいますと委細承知仕りましたお家へお歸りなりました皆様へ宜敷おつしやり

下り

ト延登代とお初どが話し居るを奥にお花が聞き居りて下婢の歸るを待ち受け

花 「お師匠サンお静さんいお警古とお休をなさるとかですぬ何んでしよこの愉快い清元を氣が知れませんね 延 「何よか御用事でも在んでしよ 花 「何よも用事い在りやませせんいね私しらい死んでも清元い止しますまい 延 「それや宜ふ御坐いますね

ト二人話すもお花いお静が清元の稽古を止せし心根を顧みずして已のが心に引くらべお静

の所置を笑ふとの淫れし心是非もあし

第三章 (艶曲心を淫す清元の門下)

お花の師匠の元より歸り來て母のお房は打向へ

花「お母さん只今戻りました房「今日は大層遅かたの花「ハイお師匠さんところ遊んで

居まして遅くなりました房「お花そこ休んだらお淫ひをえよ花「ハイ

ト云へつゝ、替古三味線手へ抱へ大聲上げて歌へ出す清元もよろづよし原三谷堀たから船で

や初買よよい初夢を三浦團辨天さんとそひぶしのと梅の春終りし後ハ后月名殘島臺傾城の

文句も戀の初風身よまみくくと朧月夜のあこがれをめしと淫ひ終りしを母ハ聞き居て

房「お花暫時間は大層上達な成つたネー花「お母さん眞實は清元ハ粹ですぬ

ト戀の文句の清元を我子が上達な成りたりと賞る母親お房より母の前とも憚らぬ淫狼がま

しき清元を唄ぬハ粹お親子とは他の見る目よや云ハれまじろも之のお花は淺草須賀町店

も土藏の角屋敷西洋物を商ひて最と有福は暮しける金子三五郎が娘もて母のお房が元の

身ハ三筋の糸を力草糸より細き玉の緒を繼ける業も柳橋藝妓と勤め名をバ小房と云へし其

當時今の夫の三五郎も度々座敷に招かれて縁を繼ぎの船宿に下す錨の床は海まじく情け

重夜具夫れとの人ハ岩田帯解けて産れし女の子これぞ即ちお花もて意氣地を張りて三五郎

ハ遂に小房を根引して已れが妻となしたるより二人か中も睦ましく暮せし内よも一人の子

供はへバ立て立てば歩めの親心で何つまか其子も物わさまいる五つ六つとなりしかバ母親

お房ハ物見遊山ハ勿論何處へ行くも手を引き必ず同伴に連れ歩き幾歳となく経過ぬれ

ど子供を學の道とては躓ませもせよ己のか好める三味線や踊りの藝を仕込ませて淫ひの

度ハ譽れを得るを樂しみよ又幾年と遊び過ぎ今清元を習ハせ居れる

第四章 (壯士談を和す根岸の菴上)

都人士も閑雅に居れる根岸の里御行の松の樹の下と流るゝ川の邊なる誰が住めなせる菴な

るか一人り書齋を閉じ籠り今しも洋書を繕きて切り勉強爲し居る折から頼むくと呼ぶ
聲は門邊よなせるものあれば下婢を命じて其人の如何なる用事のあるやらを問ひ止めし

下婢「何誰様で御座りますか 客「ハイ拙者は松田三郎と申するか島野環様の在宅で

滲坐りませか 下婢「ハイ滲宿在て座ります 松「然らば一寸滲面會を願いとふ御座りま

すれば此段滲取次被下 下婢「ハイト云つゝ立て書齋なる島野環を跪き

下女「只今松田三郎様と申す方が一寸滲面會を願いたいと申し居られませ 島「諾松田さ

んならこちらにお通し申せ

ト島野が指圖下婢の松田を案内して嶋野が居れる書齋の方へ導き入り

島「ヤー松田君が先日は失敬宜く入來た 松「島野君實は先日失禮致した今日の上野迄

遊歩かてら來り因て一寸の訪問致した譯さ君の大層の勉強じやの 島「エ何れも勉強のし

ないが今歩馬斗り課べたいことかありえ因て書物を出えた處さ 松「然るに勉強でん身

体は障りませとよ少と面白話しでもないかね 島「面白話しなら君許多成し玉へ僕も聞きも

うそ 松「チャ夫れいれ方達へ君か面白話しをしたまへ僕も聞きよ來たのじやもの……

併し私しから一ツ話そうかの先日そら君と一緒に井生村樓で演説と爲たとき幾多の傍聴

人か其中に向ふれ角立ち居りし二人の女子ありえか君の目も附いたかね 島「それや

眞實か僕の不幸にして視なかつたがそうえて其女の何様したと 松「何様したつてマ一聞

き玉へ其女と云ふは沈魚落鴈閉月羞花と云ふも只ならそサ 島「夫れやめずらしいことで

したナ一体演説等よの婦人の來なかつたものであつたが漸々開化に従がつてそら婦人が

傍聴に來る様よなるどの誠又有難い譯で……併し其婦人の眞は演説と聞よ來たのでし

ようか 松「何れ會場へ來るからよの傍聴も參へつたのでしようか就中其中の一人と云

ふの切りて聞き居し様も見受ました 島「果して然らば實は感心した婦人じやね 松「然り

君の云ふ通り感心な女だがその女の何處に居るので在るか 島「君の夫れを穿索して何様

とるか 松 「僕が穿索するの外でも無いがろんを別嬪として演説等も耳を傾ける様な志ある女なれのワイフよしたいからよ 島 「君よの女の事一言でも談話の出来ないね直ぐよ自分の身の上の話しよ引寄するからいけないよ 松 「それだつて宜いぢやないか君と云へ僕と云へ行々の妻を娶ふよやならぬ身ぢやないかそんなら其話しをそとて又笑ふことはないよ 島 「それの宜いが今話した女の何處も居るものやら一向知らされの君か穿索することの出来ぬ哩

ト二人の田舎なまりの丁寧言葉も何時の間もやら書生の語氣の現れつゝ、島野環の笑も乗じ茶と飲みながら松田三郎の顔を打望み君マ一麵包でも食へ玉へと菓子麵包を其處へ差出したたり

第四章 (壯士談を和を根岸の菴中)

松田の麵包と食い終り

松 「だつてそんな宜い女と人よ娶られちや殘念ぢやないか故よ人の娶らない内よ早く穿索して以てワイフよしたら宜いわはて何様したら分かるだらうか君が孔明の智慧と振ひ出してくれ玉へ 島 「そんな智慧の出るか出ないかの後の事として先づ其女か見當たとした處か若し其父母よして君との婚姻を許諾ない時の何様する其婚姻の許諾成らされの穿索した處か所謂勞して効あしの例よ漏れん 松 「君聞き玉へ父母の許可の如何よの關係なしさ僕よそんな干渉結婚の誠よ嫌へじやに因て自由結婚でさきの女か承知さいすれい夫れで充分さ 島 「夫れい君の云ふ通り干渉結婚の好む處よ非されとも我國の慣習未だ脱せざるにの是非がない…………併し其様な慣習の一日も早く洗除て自由結婚と行ふが宜いか其女よして又承諾せされの其時は同様する 松 「君の實よ把憂家じやの承諾しないと云ふ事のみあるものか…………然しあつたときい君の云ふ通り仕方ないの 島 「そんな結果を生ずるぢやよ因て穿索の一件の先づ止し玉へ夫れい左様と今自由結婚と干渉結婚の話が出

たから思ひ出した君か先日演説したる自由教育と干渉教育の利害の宜く論じたね松「あに思ふ通りにや辨じ盡せなかつた鳥「あれで充分で處で僕か本宅に在ると何様してか父と兄として何學を勉強せよとか何の學校へ入校せよとして少しも僕の思慮を考へずして種々干渉して五月蠅つてたまらない何様まで干渉したいのだらう僕に實に其干渉か否でならないから不便の處じやが此の根岸の隱宅に一人別れて居るのさ君なんぞは東京に干渉家が居らぬいかう思想通り教育を受けられて宜かろう松「ほんゝ然さ僕は自由にあつて宜い鳥「僕も此處へ来てから誰れも干渉するものないか然し自由教育の若し誤つたるときいへんでもない結果を來すあれに余程注意の注意して勉強し往かなければならないよ松「眞實に君の言ふ通りさ鳥「先づ僕に勿論君もますます精出し勉強して一旗擧げなければならぬ見玉へ廿三年に至りて國會の開設なりたるときと際して其國會たる尙ほ今日の府縣會の様な体裁での眞實に國人の不利を云ふまでも無く外國に對して恥ることでもないか夫れに内地雜居と来て見れば人々の無學で居て何つても外人の好利を占取られ遂に内地雜居の利益を受くことが出來ぬ哩され斯の如く不都合なき様は我々の先じて力を盡さねばあるまい松「君の云ふ事の皆尤もそうして君に勉強後一旗擧げると云ふは何と業とするのじや

第四章 (壯士談を和す根岸の菴下)

鳥「蓋し僕の目的は社會の耳目たる新聞記者となりて世の幸福増進と斗らんとするよあるが君に如何なる用途を立ち居るか松「君に新聞記者となり善美なる輿論を造り出さるゝ事は盡力せらるゝに實に國家の爲めに喜ばしき事共あり實に我々も君と同じく率先無學の民を開明の域に誘導せざるべからざるも一り其成す業に至りては君と大に異にして僕に官登を臨む處だう之れ即ち人々思想の差へる尙其面の如しと云ふか如きサ鳥「君に官登を臨むといへれも宜い併し何んの業たるを問ひつ各本分の義務に必ず盡さざるべし

得されはみつしり學問を勵むべき事サ 松「實は然りね互は勉強致そうぬ時よ今日の大層長く君のお邪魔と爲しうか許してくれ玉へ 嶋「マ一宜いしやないか決して僕の邪魔はなりやしない 松「遅くなるよ面倒しやよ因てお暇もうそ 嶋「そんなら又閑暇と遊びよ來玉へ今より僕も運動かてら上野れ山を散歩すればそこまで歩同伴は参りましよ

ト二人の菴を立出て鶯溪を越へ摺鉢山に登りて彼方此方と望み視廻し時しも月の楓葉も色は赤きよいや増して赤き心の二人ある胸は響ける鐘の音は堪へ歸る小鳥も何となふ故郷の情と思ひ出し頓て清水堂は詣でりて遠く彼方を望むれ夕日の西は傾きて富士の高根も豊かさよ近く見下す不忍の池も漣みうたぬ國民と一事一物目に觸れて二人の座る感情を催して邊の茶店も息へ互は語り語られつ少し休らへ居れる向ふより此方を指して紳士然たる男の年の卅五六身よ絹布の衣裝も胸よひらめく金時計八字の髻を捻りなから右へ二足左へ三足飄然と酒氣嫌藝者を連れて何やら解も分らぬ話しの聲も高らかよ之れ見よか

しと來かゝりたれの松田の見つゝ

松「ナイ島野君島野君見玉へ高慢らしくやつて來たあれ何物で有う一寸見た處でいせントルメンも宜しくじやの 嶋「如何にも着飾りと云へ顔付きと云へ眞實な紳士らしい…併し外見ばかり紳士らしくも内實の學問も無く智識も無い偽紳士が世の中よの數多在れいあれも其類ならんか 松「實は君の云ふ通りで考へて見れば可笑い物だ 嶋「可笑いと云へい人と云ふの變な物で財産さいあれい其人と皆才賢らしく思ひ用へるか其人も亦何も知らなくつても知つた風して居るは實は笑ふ堪へたること之れも必竟其様に思ひ用へる人々か一体開けないのだ 松「開けないと云へい或る縣會議員を撰擧するとき財産家某を撰擧したか某氏の前さよりの話しの如くは學問智識と云つては無一物で只有るの財産のみこんな人を議員として議會へ出した處が何様する事だろう之れも君の話しの様な笑ふ堪へたりさ又此の様な人は限りて議員よなりたがつて居る、學問智識の有る人

々々無財産家も多いか之れ等の人の財産か無い故議員もなれず噫世の中儘もあらぬものじや哩それ附いても貯産撰擧法よりの普通撰擧法の方か眞の人物と代議士も出せるから宜いな 島「話ししか又大層高尙もあつたか今の紳士先生の何處かへ行きて姿も見えずよなつたどりや僕等も歸宅しよじやないか 松「又斗らずも話しよ時を移したちと島野君遊びよ來玉ひ

ト茶代を置きて二人の互は失敬くくと右と左に分れて歸宅せり

第五章 (從學譽ヲ博す一章の論)上

實よや一寸學べの一寸識るとか大坂屋事村田れ静の好きな三筋の糸と思と斷ちひたたら學問よ身を込めて勉強なしたる甲斐ありて早や普通學科も卒業しけれの或時母のお安の云へける様

安「お静やお前の年も漸々人目よ就き此間或る處よりお前と嫁よもらいたいと云ふて來

た家が在たがね前の人娘故家の相續とさせねばなりませんかと云ふて斷つさか然すと又こんだの婿を世話致そうと云ふて來たかお母さんのお父さんと相談中だがお前もモ一學校の止す方か宜いでないか

トお静の思ひ掛なき母親お安の話しよ大驚き

静「お母さん只今のお話しの承知致しましたか學校を止せと云へですが只今の處が學びの中一番大事な場合で涉座りませそれのお父さんと涉相談の上後二三年斗り學問も勉強させせて被下ませ 安「お前の良く考へるか宜いか家の商人で在て見ればそう學問の入用でなし且つ婦女の身の上なれ男子と異つて學問をした處が役立のせまいからお止しと云ふ譯さ 静「お母さんの仰せと私しの剛情張つて背きますと云ふで涉座りませぬが一應申上ませそれのお聞き取りくださりませれ母さんの商人じやよ因て學問の入用でないとお話して涉座りまするが決して左様で涉座りませまいと考へられます今涉存

の通り華族も士族も平民と申すも者同じ事で華族だつて馬鹿で汚座りませぬ仕方もな
く商人でも伶俐でさいは座りますれぬ夫れだけ人又信用せられ又自分の利益と云ふもの
でありませぬ成的學問して置ねばなりません又婦女の學問は役立ぬものか云ですか
男子だつて婦女より愚かなものも汚座りますし學問を致しまして役立ませぬもの
其人社と學問を致しました甲斐ないものと申さねはなりません私しは學問をしました
上げ及バづあから夫れを役立ませぬ慮見で汚座りますれぬ何卒後二三年斗りで宜しゆ
う汚座りますれば學問させて被下ませ此義幾重も願上ませ安「然う云へばお前の云ふ
も尤もだかお前が學問とすると云へはお婿のもろう事の出来ぬの……お父さんと云へ私
しと云へ漸々年を重ねるばかりなれぬお前又早く相續をさせて私し等の隠居したいから左
様云ふた事は静「お母さん私しがお跡を續かすの誠小有難う御座りまするかまだ學
問と致ます身で御座りますれば結婚の急いでいたしますまい又早う結婚を致しますれぬ

其子供お害を遺しまするとかお聞申て居りましたれぬ程長くお父さんよ其事をお話し被
下てしばかりの間御見合と願いとふは座ります

トお静の言葉に母の云ふのを話かさるも決して無理ならざる事とお安の最と感心したが
當惑そうよ

安「お前がそう云ふ事なうお父さんよとつくとお話し申上て前きからお前よ云ふた事は
「しづらく見合そうか併しお父さんはお聞よあらぬ時困るよ……静「お父さんよのお
母さんより宜くお話し被下ぬお聞にならないことは汚座りますまい安「何んよまろ明日
私しからお話しもうそ……

ト云へ終り後の世間話しおまざらせて其日のあいなく過こしたり

(第五章從學譽を博と一章の論)中

古昔より商人よの學問の無用な物との慣習も今の左の無く商人とても學識あれの世よ用へ

られ華族士族と云へばとて愚かき物の世に捨らるゝ實に有難き文明に遇偶しを嬉しきされば商人とても學問せねばならぬ者又婦女として學識かあれに世間の交際の出来るものなれに學問を勉強して益々智識と磨かまやならぬ夫れに附けても私に外國人よ就て英學でも習ふか宜いと熟々思ひるお静が心底を推察たる母親お安の種々思案を廻らせて一人言つゝ

安「お静の到底私し等の云ふこと聞かされに寧の事お静か云ふ通り後二三年學問に身を入れさせた方か宜かるう若し左様ともせされに如何なる事と仕出かすやらも圖られず今の中が大事な處じやよ因て夫よ良く左様申まじよ

ト時しも夫長三郎か店より座敷へ入來りたるをよきしほよ

安「あなたお静も先日來のお話しを聞かせましたらお静の種々申まして許ませんが又其云ふ處を聞かすれに尤もの事も御坐りまする……

トお静か話せし一伍一什を物語り如何したら宜しゆう御坐りまじよかと相談しかければ

長「されに困つたね一体お前が日頃お静か云ふことをなんでもかでも諾々と甘いからである……併しお静がそう云ふ事なら又是非もあい必竟私し等か早く隠居したさよ婿養子とか學問を止せとか云ふ話しが出た譯なれに私し等が未だ其様な隠居心の止してお静の云ふ通りしてやろうかの 安「左様しておやりなされに夫れ社を嬉しうるで御坐りまじよ

さうしてお静が申すすの後二三年間外國人よ就て英學とやらを習いたいと云へましたが外國の學問をしまして何様する心でしよ 長「何んでもさうあるからの致方なければお静の云ふ通りよさせまじよ此頃貴婦人方か慈善會とか舞踏會とか又婦人交際會とかを催されるが之れ等の皆西洋の風儀又習はれる事であつて見れに後日何んな事が行はるかも知らされにお静も洋學を習ふて居た方か爲めよなるで有ら然し私し等の子よ何様してこんな學問好きを性質の者か生れたであらうか 安「我子を譽るでに御坐りませんが鷹が鷹と生だとやら申ましたら大層な事ですがお静も伶俐になりませぬに何んとなく親の譽れ

では坐りまするが世の中は數多ありまする生意氣學者と云ふ様な者よのならない様よし
たいものです 長「それらの説論の私しが云ふよりお前から云ふ方が身よしむれば懇ろに
聞かしてやるか宜い

ト話し居る内店より小僧か入來りて

小僧「只今店へ銀行れ者で有ますか旦那一寸御面會と致したいと申て來ましたで汚坐
ります 長「今直ぐは店へ行くから待たして置きな

ト云へつゝ座敷を立て店の方へと行けれ跡でお安のお静と呼んで話そうとて

安「初やお静か居たら一寸此處へよこしておくれ 初「お嬢さんお奥でお呼びなさいます

静「初お母さんですかハイ

ト返辭をしつゝ母の傍へ手を就きたり

第五章 (從學譽を博す一章の論下)

安「お静や今日お父さんよれ前のことを話を申たらお前の云ふ通りお許しありたれば

お前の心を入れて勉強しておくれ左様して何處の學校へ入る都合ぞやの 静「夫れは誠

嬉しいことで汚座ります然うして學校の築地は英國の婦人て學士がお出で汚座りますわ

ば其か方よ就て英學と勉強するつもりで汚座ります 安「そんなら其處へ來月から通ふか

宣

ト其月も過ぎたれのお静の毎日淺草の宅より築地なる英國學士婦人の元へ通學して一心よ

勉強えて幾月と過ぎ早や二年余を重ねたればお静の螢雪の効現のれて語學も充分他の生徒

よりの秀りて早く進歩してけれの教師も余程楽しく思ひ一層勉めて教授したりぞかバ今の

政書も解り來て己のか娛樂みまざれば新聞紙上の論説を是非論難し時々文章を綴りての新

聞へ寄書等爲し居る節しも東京二三の大新聞にての切りよ日本婦人は關する事柄を論究と

るあれはお静の情々思へる様こゝぞ思想を吐露して日本婦人の輿論を惹起さんと直ち筆

紙を取寄せて日本婦人よ告げてふ題以て古來日本婦人の教育も受けざるよりして恰も男子の奴隸の如くなり自から卑屈し陥りて浮む瀬もなき今日に有様女權の振るはれざる原因是非なき事共なり併し尙今日に至りても之れと傍觀なら置かば後來如何なる結果を來せうを知られす實と思ひ半ばは過ぎて切齒の至りなりされり今日女權の振起と圖らんと欲せば婦人の男子は奴隸視せらるゝ事の慣習と打破らざるへからず之の惡慣習を洗除せんと欲せば婦人の教育を高尙し導かざるを得ざることを詳細論述して新聞に掲載しければ其文綴美飾意義貫徹讀んで論のづらるを知らざるか如くして大は世の喝乎と得忽ち筆者お静の名と博せられしを譽れなりし譽れと得たるお静よりそが教師たる學士に己のか榮譽を得た如く欣喜あひいる事共をお静の両親の聞くよりも飛立ほど嬉しがかりしを道理なりをれよりお静の益々力を得て英學と勉強なし又間々は論文を草して新聞紙上記載せらるゝを娛樂と爲し居りし

第六章 (榮華掌を翻す露命の苦)上

巨萬の金を貯蓄ふとて敢て高慢に足らず鏗錢なくとも敢て屈するは足らず金の天下の回り者怠惰者より遠ざかり勉強者に附き易くさても金子三五郎の漸々商も繁昌し益々金融も良くなり且元來の金満家なれば何れも不自由を感ずることのあらざるより自ずから驕心の生じ來て家内と打連れ春の芳野の花を訪ひ夏の箱根の温泉と秋の立田の紅葉も冬の墨田の雪見も榮耀榮花の驕りを極め少しも店の商事も身もよせず間も洋銀相場も手を出し不時の僥倖を的として數多の金を一獲み取りつ取られつ其年も過ぎたれば今も他も爲す業の打捨て、専ら相場事のみよ心を入れ益々利益を得んものと思ひし的手違へて買ひ相場も安くなり賣れば高くと心にまらせぬ亂高下忽ち數千の金も人手に獲られ取られし金を返さばやとあせりて又も勝負も手と出せば見る間もなく負け續き不幸のみぞ多くして商店も閉じめる有様も他も借財はいや嵩み最早返濟とてもならざるより家屋道具も借の

方へど人手は渡を長く住居し須賀町を人目忍びて夜の間は家内纏めて行方知れぬ引越したりしぞ浮世なり實は明日の榮華も今日の夢移り替はりし長家住み九尺二間の荒家は雨露を凌ぐと云ふの名ばかりよて夜の燈火も附け難く軒漏る月の光りをたよりと頼むも盈れぬ欠くる暗の夜の一重の壁の隙間より隣りの燈火を借り受けて夜々過こそ敢果あさの人力車夫や日雇と同じ言葉の交際も力業として出来難く鬱々として過ぎ越し方を思ひやり愚痴な繰り言繰回し巻く芋環の糸よりも細き三人が露命と繋ぐ手だてもなきさ漕ぐ舵を取られし捨て小舟寄る邊もあらぬ身の因果々々の廻る小車のくるり〜と娘お花が嘗て習ひし清元と力頼みとしかけたる最も哀れの境界は陥りたり

第六章 (榮華掌と翻す露命の苦)中

三「榮枯盛衰の定めなき人の常どの云ひながら誰あらう淺草での金子三五郎とも人と言いやされしものが見る影もない此状態ノ一女房同様したる宜かろう……房「あなた様今

日の様なころ米の代も困りまする場合は是れは是非なく可愛相での御坐りませすがお花を何處へか勤めに出しまして其身の代金もていも暫くは助かりまする方が宜ふ御坐いませしよと考がへられますが如何でしよ……三「私しも爾でもしたら一時の凌ぎもなるだろと思へ居つたか流石に娘よの夫れと云へ兼ねてあつたか今お前もそう云へ出せの可愛ければ何處かへ勤めに出うるか房「されの娼妓も身を汚せしするよりの藝も何くらか覺へて居りますれは藝妓もいたさせませしよが夫れに附ての東京の地では人目も掛りますれは田舎へ出しまする方が宜ふ御座りませしよね三「其處にお前か宜い様も取斗ふてくれ房「そんなら今お花か歸りましたら話しましよ……

ト云へ居る内にお板カタ〜とお花か歸れぬ

房「お花一寸お母さんがお前と話したい事かあれのお出花「何御用ですか房「別用と云ふので無いがお願か在て……花「其私しよお願どの……房「願と云ふの外で無いが

お前も知ての通り往年お父さんの相場は手と出されて御損毛をなされ夫れからと云ふもの不幸の引續き須賀町も居悪くなり終よこんな不潔い處へ入つたも今のお金と云つて見たいつても見られず衣服の類はお前のも私しのもお父さんのも皆質草となつて仕舞最早賣るも賣る物なくお米のお錢も困り居る爾とて三人頭をそろへて居て日干よなるの必然されお前の嫌な事別つて居るが其嫌なのを堪忍て此處を判へ私し等二人と助ける爲め暫らくの間何處へか藝者勤めでもしてくれまいかノ……

ト云ふも涙は咽びて袖と袂と濡しつゝ

房「可愛お前も向つて少ともこんな事ハ云へとうの無いか如何ある不幸で此様は困るしと思ひをせよやあらぬか神や佛も見放せしか之れと云ふも余り榮華は過でしたる其罰か現在地獄の此の有様何としたら宜からふ……

ト大聲擧げて泣出せる母のお房の心より聞き居るお花の膽も裂かるゝ憂き思ひ袖は涙と拭

きなから

第六章 (榮華掌を翻す露命の苦)下

花「お母さん其滲心配の尤もては坐りまじ今よなつては不自由となされましますも皆お父さんの相場斗りで若し相場はお手が出なければ決して此様な事ハ坐りませんもの今となりては何んと申しましても致方ハ坐いませんか之れも約束事と斷念私しのみ今お母さんのお話し通り何處へか勤めをいたしましよが……併し可成なれハお母さんの近傍は居りどふ坐ります三「お花お前の年もまだ十七よなるかならぬ賢てへ皆な私しか悪るいづつかりでこう難澁をさせる實は意氣地がないか之れも是非なければ肝忍してくれ……房「お花お前の云ふ事と許えてくれて有難い眞實は嬉しい……然うしてお前の私しの近くは居たいと云ふ實は尤もで今迄一ツ家居て別れるどの心細いだか東京は居て藝者でもとると人目よ掛り安く却て恥なれハ遠方でなくとも田舎へ行く方が宜らうと

思ふか何様する花「左様で汚坐んすれの何處なりお母さんのお指圖も成りますすれの誰れか世話する人よお頼み被下……房「然うさまつた上り一日も早い方か宜かろうから之れから世話人の處へ頼みよ行きまよ……」

トお花と連れて藝妓周施人へ相談に行きたる處折こを良けれ埼玉より抱よ來た人の其處よ居しが前借金百圓ふて二年稼れ約束よ忽ち相談調へて翌日の身体と引替よ金圓頂さましよとて二人の歸宅をしけれ

三「お房同様であつたかノ房「好い都合で埼玉へ行く様よ約束して來ました三「夫れ好い都合であつた然うして何う約束をして來たノ房「ハイ二年稼て百圓の前借で坐りまして翌日お花と引替よ受取る約を致したです三「夫れさらお花の翌日埼玉へ行くか彼方へ往つたら暫らくは顔も見えれまい随分健康で居てくれ花「ハイ翌日は愈々お別れ申さよやなりません……」

ト之れか暫しの別れ酒親子三人の互よ酌替しかあしき話よ其日も暮れて翌れの支度もそこくよお花お房は出て行く折しもなるや鐘の音も哀別離苦と聞なされ後と見送る三五郎又今更れ様と思はれて無念の涙やる瀬なく袖と噛め男泣きお花の見回りく名残の泪止め兼ねお房の見る目濡して周施人の許へ行きお花を渡しけれの周施料と引去られし跡金をお房は受取りお花に向へ先づ壯健で居てくれと一言殘こして歸宅を資本に細き煙りを立ち居たりお花は其日抱主と同道よて上野の汽車よて埼玉へと到着よける

(第七章惡縁契と絆す三筋の糸上)

まん無し島田よ左様三筋の糸よりらき世を渡り繋ける憂き身よ心よ思はぬ愛敵も粹と不粹の相調子調子よ乗せて客人を娛ましむるぞ勤めなり夫れよ岡目にや小意氣なる家業と云はるゝも亦可笑しさてお花の埼玉の料理茶屋吾妻やの抱藝妓となりて名をば小花と改めし其名弘めれ當日より此地の遊治の我れ先きよ招きて見んと彼方此方の茶屋々々より夜毎

々々よ呼はれて吾妻やの小花が爲めに時あらずして全盛の其勢ひも座敷も最とい廣大な遣り直して景氣を張り或る夜さよ多くの客か動やくと上り來りて酒や肴も謠ひや舞の大愉快中ある客の一人のそが以前より負最も爲して遊び來る桂木源太郎とて今しも女中を呼びて

桂「此家へ東京から來たと云ふ小花を座敷へ出でてくれ 女「ハイ只今直くよ

ト立て主人よ云へは小花の衣服着飾りつくるへてへい今晚いと云へつゝ座敷入りて一坐の象を見回せる容体は婀娜な東京風言葉優しき愛嬌も彈き出す三絃に粹な端唄や都々逸も益々興を添へ居る中

桂「小花チャンハイお一ツ 花「チャ有りー

ト献れし盃受けなから見替す顔も小花はハット顔赤らみハづかし相にハイ御返盃と又も桂木が顔と見れば見る程玄かどの思ひ出さねど何様やら一度見た様なお方じやかと

花「旦那あなたに東京よお出なされいしませんでしたか 桂「私しに二三年東京よ居つた

事があるか夫れを何様して 花「何様も致しんしませんか何處かでお見かけ申た様と思はれましたに因てお聞申ました譯です…… 傍人「桂木さん何んだかあやしいですね 桂「決して左様云ふ事はないですが聞かれたからです…… 花「何んのお聞申ましたがつて宜ふ

御座いますハチー

ト少し考へ廻らして左様を今より二年程前井生村へ演説を聴よ參つた時思はず知らず後へ振向へたらお出で有つた倩姿のぞつと身も染み思根の斷へやらざりしお方であるか不思議や縁縁が有て今此處でお目に掛かつてお話しが出来るとい神の我とや憐みて導き玉はれし事なるか嬉し事と遂い聲立てたれば

桂「何よがそんなな嬉しので在るか少とお聞かせなさいな…… 花「何よも申の致しませんこと…… 桂「だつて今聞きましたも…… 花「チャ爾でまたかああなたのお耳へ聞こえませ

したですか……そんなら尙嬉しゆう侈座りませへ桂「小花チャン思ハせ振りばかりでは
何んだか變ですへね話したかつて宜いでしよ……花「そんなら云へますが……何うも人
目か悪ふ御座りまして……傍人「二人が前つきからお惚げですなやけますハモ一少焉騷
ひではないか

ト云はれて小花の止む無く三味線把りて最ども陽氣は弾き出して始尾好く客と歸したり

第七章 (悪縁契を絆す三筋の糸)中

不思議や小花は戀し床かしの其人は廻合へ心のたけと語ろうと思へりしたか初の逢瀬や人
目を兼ねて其日の遂云へはたさゞりしが夫れより二三日も過て此度の桂木一人が遊び來て
と花と呼へば小花の嬉しき耻かしき今日に充分お話しもうそうとて座敷へ出て先日の禮を
述べ世間話しを爲し居る折から

桂「夫れハ然うと此間お前の私しを東京で見た事が在つたとか云ふたか私しの少とも知

らないよ花「御存ないの御尤です今より二年余り前只私しか或る處でお見受申した斗り
ですも……桂「其或處どの何處であつた花「ハイ東京の井生村樓と申ました處に演説か
ありました其時で御坐りまして桂「扱てナ一思ひ當つた私しか演説を聴きよ行つた節私
しの前も娘か居つたがそんならお前の其娘で在つたか私しか見たとき美麗で粹な娘だと
思ふたか成程そう云ひの好く似て居る哩花「左様で御坐りました私しかあなたの調度お
前も居りまして後へ振向きましたらあなたのお姿見るよりぞつと戀風の吹かれて染むる
いづかしさよ言葉もお掛申されず其儘お見失ひ申ましたか其日より心の情け斷ち難く鬱
々と思ひ過でします折から家の零落し両親の困却居りますより是非なく私しの此地へ賤
しき此勤め……併し勤めを致しましたれのこそあなたとお逢ひ申ことか出來ました……
ほんに嬉しゆう御坐りませ桂「それの罪でもない私し等如きよ其志し然うと今お前か
話しよハ家か零落したが爲め此勤めをするとい花「ハイ申上ますも何んで御坐りませが

家の相應な商人で御坐りましたか親が斗らずも相場も手を出しましてから漸々損毛か引
 續き遂も其處もも居ることが出来なくなりましてより両親は益々因却り食ふも差支へ
 まする様もなりました故致方なく両親の爲め此家へ百圓の前借で参りまして其か金で
 よふく命を繋がしました……チャ今日は飛んでも無い陰氣な話話を致しまして何う
 かお許し被下桂「夫れの氣の毒な事じやの併し袖すれ合も他生の縁とか云へは及ばづな
 かとお話し合もなりましたよ 花「誠は有難う参ります何分たよりない身でなりませぬ
 れ見捨なくお情をお掛け被下ませ……
 ト頼み合其日も別れて其後は度々遊び來れり自然と馴染むも従かつて互も明も心れ中解
 けて結ぶや葛 葛 緑の松の變りなふ千代に八千代に末りけて長き赤繩をちりしりしぞ

第七章 (悪縁契を絆す三筋の糸)下

端唄「待ものと思へばるがさ籬の外通る人目を木蔭よよけいつしか更た春の夜の短き夜半

と限りなく立身も寒く花の風實もおそいぢやないら

花「チ、眞に今聞いた端唄じやないが今夜の兼て約束の桂木さんか身の代金を調べて
 出よなる筈だの遅いと云ふもあんまりな時九時過ぎ十時は近い何様なされたか待ど
 しい……飛鳥川昨日の淵の今日瀬と變り易さの人心と唄も云へり若しや又桂木さん
 の心變りでもせられたか莫遮 既も主人や友達も勤めを引くと話した上におめく居る
 も恥る、斗りてあつて見りや寧のこと一人此家を逃出そうか

ト一人言つ、胸塞き途方暮れて居る折しも桂木さんよりのお手紙ですと下婢も差出すを
 小花は取る手遅しと封トめ開き其文言と讀み下せば桂木の賭事の爲め多數の金を人手
 取られこれが爲め今夜約束の金もなくなり已のか身体も當地お住居の出来難く今夜の中
 東京表へ逃去れり悪から承知してくれとの意味なれり小花はハット喫驚きさるも思ひ直
 して之ふなるから是非もない戀えい桂木さんの幸ひ東京へ行かるゝとあれば私共も一途

お逃去とふ心を定めて支度も人目お掛らぬ様と氣配りなして忍び出で兼て聞き居し桂木か
 宅を尋ねて訪けれのまだ桂木は去りやらず小花は匆卒て其趣きを話し夫れより二人共よと
 手を取りて東京指して逃て來る夜もをい〜と更け渡り冴えし月も雲隠れりくれて逃る
 道さへも互に忍ぶ野邊の草葉すへの露か螢火も若し追手りと心の最とゞせかれても疲かれ
 し道の排とらず便る宿屋もあらざれば草をしきねの肱枕まくらさわがす鳥の音も心のげみ
 て東京の小花が親元へ到着たるも二人の僅り小遣金の其外は資本と云ふのなき身なれば何
 商ひとても爲し難く今日と明日やと過す内小遣錢も尽き果て、困り居るるか中へ増玉ある
 吾妻やよりの小花の逃走したるは驚きて四方八方へ手と別ち東京へも尋ね來たれの親元な
 る金子三五郎方へ隠匿居ることの知れて早速迎へへ行きたるも小花の増玉へ戻るを嫌へ
 談判の上前借金と償へせんも素より償金とてもあらざれり柳橋の菱屋と云へる藝妓やへ
 借金あして増玉方の婿を附け己の再ひ藝妓を勤めに出たるを浮む瀬もなき身の因果又桂
 木の何つ迄金子が方よ日を暮せ居るもならざるより奉公住をしたりける

第八章 奇遇交と約す新年の宴上

笑と負ふて郷關と出づ業成らずん死すとも歸へらずと此は之れ書生の常言あるも稍東京
 の風は吹かれの心變して父兄より送る處の學資金の弱柳を手折るの資となり寸金の光陰も
 夢幻の中へ消え遂は志達せず襤褸を纏ふて故郷へ歸り己のか恥辱を被むるのみならず
 父兄をして世間へ對し面赤せしむるもの間々多しとする處なるも最と感すべきの島野環松
 田三郎か二氏よして氏等元南越の生れなるも學誠研磨の爲め共は東京へ來りて同窓の下
 勉強しける其中へ島野が一家擧て東京へ引移りたれの環のそが家へ居ることへなりたるも
 父や兄等の干渉と受ると厭ひ一人松岸の隱宅へ身を避け熱心は學問を勉強し政治學とも研
 究たれば兼て希望する處の新聞記者とあり時勢を論し又間々は演説等を爲し居たれり忽
 ち其名の四方へ知られたり又松田三郎も學問へ身を勵み其効有りて登用試験も及第し或る

省の官員となり出勤し居れる時しも今日の日曜の事をあれい久々まで島野を訪いんと出掛け
たれの幸ひ居合せ種々お話しも信友の中とて遠慮意酌もかまわず時と移して談しける

松「島野君君の従事する國友新聞社で此頃切りは女子に關する論文を掲げたか就中彼
の女子情体比較論の宜く論究したです不如何も西洋の女子の氣風は東洋の女子の遠
く及のまい處です何様して東洋と西洋と斯くも異なるでしよ……そう論じてあつた通り氣
候の如何も關するといふ云ひ要するは教育の一點です子一体あれ誰れの筆ですか鳥
あれは拙者か筆ですかまだ充分で御坐りません時其節寄書の内村田静女史の日本婦
人は告くと云へる文章の宜く吾意は適し緻密な論じ在つたか君のお読みはなりましたら
松「それの知りませんでした其新聞の御坐りですか鳥「茲は在りますれの御覽なさい
ト新聞と差出せば松田の意を止めて讀下しハット膝打ち
松「君の云ふ通り感心した文章です子之れか婦人の手は成りたるとい實は吾々の恥る、

處です然して何處も居る婦人では鳥「サ我社へ毎度寄書せる其封し紙などは淺草瓦
町とい或は築地居留地英館とも書て來たれ何れか居るのでしよ松「左様でと一
そう云ふ婦人は會つて話しをして見たへもんで子鳥「如何もそうです然云へ此の
次の日曜は我社の新年宴會と江東中村樓に開きますれ社の關係の人の勿論寄書家諸
氏も來會あれ君も當日其席は列せられよとれの村田女史も會はれしよ松「夫
れは有難い子そんなら其日を待ちましよ
ト云ひ述へて歸宅したり

第八章 (奇遇交を約す新年の宴) 中

兩國橋の東なる一大酒樓中村樓今日國友新聞社の新年會の催しありとて樓上樓下の準備
を調へ軒は連ぬる球燈や川洲は打ち上く煙花の社の隆盛と祝ふなる最と盛なる景況は社員
の疾くより招聘を受けし人々も集はれる中は西洋服と着飾れるまだ年若き一婦人容貌麗し

くさなから西洋人の如くにて言葉づかへもやさかたは社員は名刺を差出し今日の招聘は預りたる禮を述べれば

社員「貴女の村田様で御座りますか今日の宜く御來會被下まして有難う御座ります拙者は島野環と申者で御座りますか又毎度御高説と蒙りまして有難う御座ります社中へ代りまして御禮申上ます静「貴殿の島野様で御座りましたですか兼て御尊名の承るのみならず先年貴殿の御演説を拜聴致しましたか御面語申上するの今日か初めて御座りまして誠に失禮致ました又毎々卑説を御掲載被下て有難う御座りますト挨拶なして島野か案内は連れられて控所へ入り休息をして他の來客と新聞紙上の談話を為居る中島野か再び來りてお静は話し仕掛けは

静「夫れいそうと今より三年程前井生村は於て貴殿の俗曲改良論てふ御演説をお聴申ましたかお蔭で漸々今で新聞等讀得べき様になりました島「拙者か三年前演説しましたをお聴し成りましたとそれの恥入りました事で然して其演説のお蔭で何んとか仰せられましたかそれの貴女のお言葉の思ひはせん静「何様致しまして妾か今日貴殿等と斯くお談話申上されまます様になりました其原因は即ち貴殿の御演説で御座りまして尙言葉と更へて申ましたら妾の意志を惹起せしめられましたと云ふ事で御座りませ島「否々拙な事演説と以て貴女方の意志を惹起せしむると云ふ様な事か何ぞかありますよか在る道理か御座りません却て吾々か貴女方の御教示を仰かあけりやならんものて御座りませも静「如何様な事を仰せられても既にお蔭を蒙りたる妾で御座りますれ其辨解に及びません先づ此話は措き前刻一寸申上した通り御面語の今日か初めて御座りませ先年御演説をお聴申上したと云ひ頃日貴社新聞紙上へ於て御交談を致しますと云ひ之れも何かの御縁で御座りましょか以後益々御交際を願いとふ御座ります島「誠にさようてこれか御縁で眞の御交際を願いとふ御座ります時拙者の國友で松田三郎と申すか此會以來

り居りますれば拙者が紹介致しすすれば何分宜敷御交際あらんことを願へまほ
ト云ひて松田をお静に紹介すれり

第八章 (奇遇交と約す新年の宴下)

松「拙者の松田三郎と申ものでありまほか貴女は御高名の嘗て島野氏より聞及ひ居りま
して侈座りまほか向後宜敷御交際の程願へます 静「夫れは恐入ります妾より其義のお願
へ申まほ

ト互に談合しかける折しも開宴の時刻來れり一同打連れ酒席に列り先づ島野の起て祝辭を
述へそれより各員の祝詞演説も終れり酒席の間の周旋は柳橋の校書三四人出し其内に
お花か居りしとお静の斗らと顔見合せ共大に驚き
花「ヤーあなた様の大坂屋のお静さまでいり座りませんでしたか 静「そう云ふそなたは
お花さまでしたか不思議な場處で面會を致しました…してあなたが今の身の上何

様なされましたことと 花「實は恥じ入りましたる事で侈坐りましてお話しもうどう様も
座りません身の因果と云ふの恐しいもので侈座りますあなた始めからお學問も身と入
られ今のりのばあお身分夫れは引替へ私し始めの心掛か悪ふ座りまして賤しい此勤
め後悔前に立ぬと申すか思いの残念で侈坐ります 静「何致せ今日の多數の人中で
侈坐りますれり昔語も出来ませんげれり私しか宅へ侈出被下
トお静はお花か身の上の變り果てたるを驚くよりもお花の元友達なるお静は會ふて赤面し
たる其風情の他客の見る目も氣の毒なりし頓て其宴會も終りたれり各々別れと告て歸宅せ
し其後お静はお花の訪來るなると待ち居りしもお花の賤業は陥りたるを恥じてか來ら
ざるよりお静も心扣へて訪りざりし夫措島野のお静は面會なしたるたり交際日々は信密
お互に往來し居れる折から媒酌人のありて島野とお静の合意は豫め結婚を約し生きて
の借老死しての同穴愛喜苦樂を俱せんと思はれたるより居を同じくきて島野の日々國友新

聞社の事務を取扱ふたり

第九章 (説話感と催す梅花の妍)上

新聞の報ずるあり「立春魁けて馥郁笑と催す梅花も氣候の勢もや北枝南枝と共に綻び初めて雅人待ち顔なる妙義の梅

静「嶋野サン貴郎の宜く御承知で御座いましょうが妾は只今新聞を閲讀まして初めて知りまえたが妙義の梅の早や綻びまして汚松りますとか幸ひ今日の日曜のこと如何で座ります貴郎の御閑暇ならば運動がてら同伴は梅見にまいりさう汚坐いすが……島「それのよろしゆう御座りませぬ……昨日新聞社まで助筆記者が梅見話を致して居りましてたがそれを今日發兌の新聞に掲載したので汚坐いさしよう……拙者の未だ梅見まいりませんゆへ幸ひ此れより同遊致ししようか静「貴郎として妾と同遊を許す被下たる上の直參りましよう……」

トお静は心の中は愉快さに洋服着飾る其間も自然と現れるもどかしさ島野環も洋服も粧装の視る眼も思ふらん

島「實おも今朝お話しの新新聞の梅信は違はず開蕾郁香を放ち鶯兒の枝は嘯るさませ得も云はれぬ氣しきでせぬ……静「之の名にし負ふ臥龍梅とやら斯く古木として春さきまなりませられ此の通り花の咲きた實を結びますと……島「如何も幾歳と經し古木で……其間嚴霜をかかし雪中は凌ぎ幹を損せらるゝこともあれ枝を折らるゝこともあり其うき事のみを耐へ忍んで之れ今日この花を開きた實を結びますと何か附けて例へよ取れます静「嶋野サン其うき事と耐へ忍びますと決して此の梅のみで御座りませぬと存じますれん思ひ半ばは過ぎます……島「貴卿のお言ひの通り萬事萬物皆同じことで就中吾人々類よとりましては否貴卿と吾れの經世よ於きましては最も適中致し

まして今此花又對しいとゞ感慨を増しましたア、今日の梅見の止した方が相互に宜しゅう御座りましたね 静 「貴郎の仰せの如く吾人の意を慰めまする處の梅花で御坐りまして却て私共は感慨を増さしめまするとい梅花又罪なもので御座りませんか…… 島 「貴卿の梅花罪ありと云へるれど胡爲れど梅花は罪が御座りませんや蓋し罪あるは梅花はわらずして他もある事で御座りませんか…… 静 「他もある事と何んで御座りませるか 島 「夫れに云ふますまい云へなくつても貴卿の己は意は解せらるゝ處で御坐りませから……」

ト二人の話を交へ互に手を把り彼方此方と梅園を逍遙散步しながらも時々悲歌と唱和しやがて茶店に休息たり

第九章 (説話感を催す梅花の妍)中

島 「貴卿の如何思召すか知らねど今日の様を好天氣の又と得難いことゝ存じます否好天氣と共に貴卿と斯く娛樂を盡くし得可きことゝ又の日どての御座りませまいと思ひます…… 静 「貴郎の何と仰せあるかどお聞き申して居りますれは心細いお話し何ぞ其様なる思ひを惹起されましたか島野サン貴郎の…… 解りました大方妾如き取る處のないものゆへ其斯の如き同遊をせぬとこのことで御座りましょう否娛樂を俱せぬとの仰せと同時は憂苦をも共ふすることと茲は斷たんと御心意…… 嗚呼嶋野サンよしてこのお言葉ありとい蓋し悪魔の魅入しことあらんか

ト眼血まらし怨ずる言葉も涙聲ハンケチーフにて顔を蔽ひ人目の關を忍びたるさきから海棠の雨は濡ひ最と愁然の体なりし

島 「貴卿の何を言へるか貴卿が言とも思ひれず貴卿の伶俐も女丈夫その伶俐も似やらぬ言の葉何を種とて斯く迄も拙者に對して怨ぜらるゝか拙者こそ解けやらぬ貴卿の疑ひ貴卿宜く拙者が申言をお聞きなされ凡そ人生の果敢なきこと尙白露の如く朝

紅顔ありと雖も夕又白骨となるとは既に釋氏も説れしことされば貴郷と吾れか只今此れ
娛樂あるとも明日わりと云ふことの出來ざる之れ此の道理を以てお話し申したことを
深くお疑念を起され貴卿之れ等の分解疾く御存知なるも如何なればこそ其お言葉
を……

トこゝもお静は再び環の言解説を聞き己が深くも疑心を惹起せしことの誤謬さを悟りて
見れば晴るゝも早く顔面上けて

静「鳥野サン今其解説をお聞き申すまで漸やく前さのお話しの次第柄容く吾胸におちま
また誠と妄か悪う汚座りましと偏う汚許くだされませ……併ながら貴卿は佛家の言を援
引れて人生不定の理を解説れ汚尤の事なれと斯く果敢なきことを思はず我等の性命の
千萬歳の曉までも生存て社會の幸福を増進せしめんことと甚力せばやと且つ思ひ想像ね
ばならぬでい汚坐いませんか」鳥「成程さう云ひるれば拙者かお話し申たの悪う汚座りま

した拙者も今之の梅と眺め座ろよ花の落るあることを思ひ出して心爲めよ狭められ知ら
ず識らず其事をお話し申した譯なれい貴卿請ふ察せられんことを……

トいなす話しも時刻を移し他の梅見の俗雅人も各歸途へ就く頃なれい二人も歸邸せんも
のと茶店と背よし立ち出たり

第九章 (説話感を催す梅花の妍)下

鳥「一週日毎の日曜何んの爲めか知らねども日々々の辛苦の鬱結を散じしめんが爲め
の安息日ならん然らば日曜日又は娛樂と盡し氣鬱を晴し平日の充分事務を執らねいなら
ぬよ平日も日曜日もをこなべて安閑と事業と行い此の貴重なる日を空しく消そ人こそ
あるが我れ等い如何他人の事物より其爲を處少小なりと云ふもの、此日曜は際し充
分の愉快を求め以て精神を養へんと欲し妙義と詣り梅園と遊歩したるも浩然の氣も得せ
却て苦慮と求めたるこそ造物主我れ等を惡みて與へられたることでしょうか……貴卿い

如何思召るか 静「貴郎のお言葉の如く樂却て苦まで御坐りましたが……アノ鶯の自由
も囀りましたと聞きましたよ附けても吾人言論の自由と得たきこと、希ふの情さし起
り又鶯の雌雄の自由も戯れ梅林も宿りあるを見まして……早く

ト云へさし後の何やら囁囁云へんと欲して言ならず眼元赤らめ環が顔と打望み暫時恥ろう
体なりしか思定めて言へる様

静「島野サン貴郎と豫て約束せし婚姻もアレアノ様も早く……鶯宿梅もなりとう御座り
まして 島「貴卿の圖らずも身の上話し拙者の又前刻のような事を言出さるゝことかなど
案じ居りましたが其事なら私しも同情同感で坐りますが貴卿と云ひ私しと云へ年未だ
若く之れより事業を起し及ばずながら先刻貴卿が云いれし如く社會の利益を斗らんもの
と此心意もわりますれば歲月長く送るべきもの……さのみ婚姻を急ぎ玉ゐるよ及びま
すまいと存じ……且つハ陋習なる早婚の弊を改良せんと熱心にも筆又口に論せらるゝ

貴卿として今私しと婚姻を行へましたと云ふたあら夫社を世人の我れゝを醫者の不養
生との例を以て笑止せらるゝ様な事を仕出來と云ふものでハ浮座りませんかさるとさハ
互の身の害のみならず折角の改良案もそれ自からよ於て排斥ると云ふものでハ御坐りま
せんか然らハ互も永遠を待ちました方が宜しゆう御坐りましよ

トお静の環は論されたるよりさこそくくと合點たるも

静「島野サン之れのロジツクも適へませんでしよるか 島「突然學理的の御質問とハ何ん
です

ト云いれてお静の微笑ながら

静「一寸お聞き被下

一 諺「男の心ハ飛鳥川の淵瀬の如しと

二 島野サンハ男なり

三 故^{ゆへ}に嶋野^{しまの}サンの心^{こころ}に飛鳥川^{あすがわ}の淵瀬^{ふちせ}れ如^{ごと}しと云^いふことですが何様^{なにか}で汚^ご坐^ざりまし

ようか

島 「そんな論理^{ろんり}法^{ぽう}があまりましようか……

ト二人^{ふたり}の話し^{はな}しは實^みが容^いり途中^{みち}の疲勞^{つかれ}も覺^{おぼ}へてして點燈^{ひともしころ}頃^{ころ}は歸宅^{かへり}たり

第十章 (春戀情^{はるこひじやう}を惱^{なご}と觀櫻^{くわんやう}の會^{かい}上^{じやう})

梅^{うめ}はいつしか落果^{ちりはて}て色^{いろ}めく櫻彌生^{さくらやよい}と遠^{とほ}く彼方^{かなた}を眺^{なが}むれば雲^{くも}ならなく白砂^{しろたへ}の雪^{ゆき}かと思^{おも}ひ
ころをかりおて近付^{ちかづ}き見^みれの花^{はな}の梢^{こずへ}に爛熳^{らんまん}と烟霞^{えんか}を合^あはせて萬客^{ばんかく}は媚^{こひ}を呈^{てい}する向島^{むこうじま}實^みは長堤^{ちやうてい}
十里^{じゆり}の其間^{そのあひだ}幹幹^{だんだん}と相又^{あひまた}さ枝枝^{えだえだ}と相闘^{あひまじ}ふるも一^{いつ}体^{たい}みる花^{はな}なるが爲^{ため}め見^み分けも附^つかぬ嬌客^{あやしき}
媚^{こひ}らるゝ都鄙^{とひ}の老若^{らうじやく}男女^{なんにょ}の綺羅^{きらか}錦繡^{きんしゆう}を身^みに纏^{まと}ひ群集^{ぐんしゆう}往來^{わうらい}織^おる如^{ごと}く中^{なか}の瓢^{ひやく}と共^{とも}に倒^{たふ}るゝ上^{じやう}
戸^こあれは名物^{めいぶつ}の櫻餅^{さくらもち}は飽^{あか}るゝ下戸^{げこ}あり又^{また}妓輩^{きはい}と手^てを把^とる遊次^{ゆうじ}郎^{らう}愛妾^{あいせう}を伴^{ともな}ふ紳士^{しんし}あれは少女^{せうじゆ}
と連^つれる老翁^{らうじゆう}も各々^{おの／＼}分^{ぶん}は應^{おう}じて歡樂^{かんらく}を盡^{つく}す内^{うち}も取^とり分^{ぶん}けて堤^{とて}に配^そふる墨田^{すみだ}川^{がは}柳岸^{かやし}は繫^{つな}げ



圖々歌唱々靜田村環野嶋

る家根船のうちや床しきさし向へ三筋の糸の根さへ解けて語ろふ有様のエ、憎い奴で
ないかいなと他人の口端は掛るとい御本人様には御推知なからあと一トリ誇れる割烹店植
半樓の雜踏の花見連中の客衆より今日の此樓上は花見を兼ねての懇親會々員集り團樂れて
酒酌と交し思ひ想いの談論中一巳の壯士屹然起て演説よ

壯士「諸君 吾々の幸ひもも今日花を墨江に尋ねることと得へ春光澹蕩の風の面を撲
て寒からず爛熳たる櫻花の紅雲の靉靆たるか如し此の佳勝の地は遊び習ふ互に胸襟を
開き思想を吐露し己れの短所を補ふ諸君の長所を探り諸君又人の長所とする處あら
之れを用へ以て滋々知識を培養し將來を談論考究する事を何んの愉快か之れは加んや云
云

然り而して今之の愉快と求むると同時は潜然として悲しみ悽然として哭せざるを得ざる
事あり他なし諸君等回顧せよ我兄弟たる諸士の悲風愁月と友として徒に鉄窓れ下し呻吟

せられ茲は互に相見ることの得可からざるを嗚呼彼れを思ひ是れと思ふて眞は花も涙を灑ぐの情を免かれざりさ云々

ト滔々たる辨の川面は響き其形詞は良く聴者として感動せえめ覺せず袖を濡し大は心と奮起せしめたり

甲「只今演説せられし何んと云ふお方でぞか

乙「彼のお方のたしか國友新聞社の島野環君と思ひます……甲「そうですか道理で演説

が達者でした……ドレ私しも島野君へ懇親願へましよう

ト云ひつゝ盃手を持ち島野が傍らに至りて已のか姓名を名號り盃と献せの酒席と周旋せる

校書の酌と執り二人の暫時談話と和し居たり

第十章 (春戀情を惱す觀櫻の會中

酒も酣頃よなりければ各々歸宅の序は就きけるも島野環の各會員より交際を求められ性

質不嗜好酒さへも一杯一杯又一杯と強らるゝ酒は斷難く耐へ忍んで飲ければ遂は病は障

りしか劇しく頭痛を惹起し其座は居るもいと苦ければと下坐敷なる四疊半は身を避けて休

らい居るとは會員知らず今の全く歸宅して此席は残るゝ此樓の下婢と校書のみ女同志の口

善悪なく各會員と評し合ひる其うち一人の校書の云へるやう

校書「先刻演説せられし彼のお方の眞個は程の好いお方でしたね……下婢「チャ／＼小

花チャンのお惚で……何かをこつて頂戴小花「何れも私への恍惚ると云ふのでありま

せんね眞個ですからサ眞個のことを申した譯です……下婢「ろうお隠しでなくても宜

いのです……ソウ／＼小花チャン忘却て居ました彼のお方のね……先刻から頭痛かなさ

れますとて下坐敷の四疊半は臥して居らつしやりましたが何様をさいましたかしらん小

花「そんなら演説なされたお方が……下座敷はわでなさるとい……下婢「慥はそうで

す早く小花チャン行て介抱してお上げなさい

トさすがに下婢も營業柄自己が面倒と小花の意とを推測り粹な言葉も小花の折良と其場と立て恐惶ながら島野環か打臥せる四疊半なる下座敷の襖を開けて身を扣ひ見れの島野の未だ快方に至らざるやら苦身さうあるろの様子と見て取る小花は動胸搖さ如何のせんと躊躇て暫し思案も暮れ居しか何時まで斯くして居るとても詮なきこととさつと定めし心して

小花「旦那様の病氣の如何で御座ります…及ばなから御介抱

もと差出す水の器物の圓さよ従ふと同玄ことなる我營業と人の言ひども心だに思ひぬ人よ従がはず思ふ方よや何の様もと腹の中よの藏めども現はず夫れと言ふことも出来ざりしぞしばらし、

島「どなた様かの知らねとも御看護との難有う御坐りますその水をもらいましよう

トコップの水を飲み終り眼を開き

島「誠よ此庇蔭で病氣も良くなりましたか御厄介と掛けて濟まないこと…小花「どう

致ましまして…なんよし旦那様の御病氣の御快方遊ばしたの何よりのことでは坐り

ます嶋「拙者が病氣の幸ひ平癒たもの、見も知らぬ御看護の勞と取らせ…何んの言葉をもてお詫中て宜しいやら小花「旦那様何を仰せ遊ばすかお詫言葉を受ます位なら何んで御介抱申ましよう…其お言葉を受ますより私イの只たお一言を…島「其一言との何んですか

ト云のれて小花の默然と只島野が顔を打守りたり

第十章 (春戀情を惱す觀櫻の會下

島「夫れの左様と卿の何處の何と云ふお名ですか實よ今日の御看護の生の慈母も及ばざる厚さ御恩の有るお方…拙者よ其姓名を知らしてくだされ小花「私イの姓名をお聞きなされして何んと遊ばす…島「夫れをお聞き申す次第の外でいなければ今日斯く迄の御恩と受けた其報酬を何日か爲たさ故小花「旦那様おなたさまの四角はつた今のお話し

何か看護の禮義とやらを爲たさ故との何事でも座ります……そんな事なら申すまい 島
 「夫れの情の強へと云ふもの拙者だつて其執酬の出来るか出来あいの解からねど若し
 や出来る其時よおん身の姓名を聞き置されぬ不都合故……云ふても良いなら明してくだ
 され 小花「私し風情の姓名を明とも明さるゝも御座りませぬ却て旦那様方よ申上て
 も知られてもらいませよやなりません營業で御座りますものを……島「イヤそんならお前
 の先刻懇親會の酒庭よて周施せられし校書衆のお方であつたが 小花「ハイ私イハ柳橋よ
 て藝妓と勤め今日不斗も此樓より呼ばれて參りましたもので御座りまして名と小花と申
 せ……島「そんならお前の柳橋よて小花ザンと云へん分りませう……夫れの難有う時
 よ會員は皆歸宅したでしようか拙者の之れより直ぐ戻れぬまだ残り居るものかあつた
 らお前からよろしく云ふて被下難有う……
 ト云ひつゝ立て出で行かんすれの小花は暫時と袖とらひ

小花「お客さまは皆々さき程お歸りになりましたし時刻も六時よなりましたれのみ今持て
 くるで座いまししょううらゝ夕飯でも御座り被下……其上御歸宅遊ばしませ

ト云ひれて島野の氣の毒相よ
 島「小花サンそれ何から何迄お心添……

ト今夕飯を持つてくることなれぬ斷みて歸るも無粹なり又折角の親切を無にするもの
 と余りよ好まぬことながら止なく元の席へと座り控へたり

小花「誠よ恐入ますが只今直で御座りますれぬどうかお体届でも御座りませうがお待
 被下ませ……私イも友達衆の先刻既歸りました跡で座いますれぬ別よいとぎません
 故……何んと遅いことだらう……

ト捨言葉もまだ夕飯の誂もせざることをなれば持て來る道理あるべき筈なげれどろこは夫れ
 者の手術ぞと島野の知るか知らぬか知らねども唯夕飯の來るを待ち居たる折ら下婢の夕

飯の仕度を調へ其座敷へ差出

小花「お飲直しよお一杯

ト盃献せ

島「イヤお酒を飲ど又先刻の様な苦痛と起すから止しませよう 小花「お飲直しよ却てお薬り何うかお喫り被下ませ 島「そうならお言葉は従ひ一ツ戴きませしよう

ト献れし盃飲ほしてそれより小花は返杯を頼て夕飯を喫りけるとき嶋野の宅より迎ひの使場合も幸しと小花に別れの禮儀を述べければ小花は最ぞなごりをしさよ

小花「近々の中よ御面會を…… 島「何れ御面語を……

ト云ひつゝ何らや白紙に包み知れぬ休して小花の袂に差入れ又夫れをいなしと帳場に至り此日の會計を仕拂ひ各下婢も祝儀を取らせ腕車に乗りて歸宅したり

第十一章 (頌歌感と漏す佛史の狀上)

お静島野の其交際は益々親密なれはまた婚姻の實行はせざれども既よ世人は夫婦の如く思ひなし又二人も互に扶助りいたはれつ早く妹とを呼ばれば寫す鏡も分さじと希うこそ情欲か二人は曾て約せし事の在るわれはその時期の至ると待ての良きこととせつと心ぞこれに之れ實よ人間に情欲の奴とこそ知らるゝも此二人の忍び難きを情欲を耐へ切りよ學術に勉め居るこそ賢けるお静の一日學校より歸り來て書齋に入り歴史を繕き偶々佛國チャール、王六世の時よ當りて益國運衰弱し内亂交も起るのみならず英王ヘンリー五世の爲めよ將よ全國を擧て併吞せられんとするよ際し民間の一少女チャンダークなる者奮然義兵を起し幾度の大戦よよく耐へ遂よチャール、をして佛王の位に復せしめんと讀んで覺ゆず慨然と机上と碁と立ち起り何か爲さんとするのたいありしも又忽よして愁然と涙と拂ひ机よ倚れ一人言つゝ思ふ様

静「我國封建時代より大和魂の三字をして男子のみよ冠らしめしが吾れく婦女子も

同じく之れ我國民なれん又大和魂なしとせず否眞個も大和魂あるものは男子中も指を屈すれば僅々だも過ざるもの況して婦女子に於けるをや去れば男子にまれ婦女子にまれ大和魂の名も恥ず文學を研磨て武力を養生せざればならぬこと何せなれん我國に假初も佛國チャール、王の時世の如きことあければ或る碩學者の言葉も社會の常は戰騷と云はれし事もあるなれん若し萬々一だも其様な時代は遭遇するの事あらん今日如き婦女子達の義俠あく自から進んでチャンドラーの轍を踏むべき者もなしされん今よりも一智識を研ぎ併せて義俠心とも養はざると得ざれんなり嗚呼チャンドラーも終は英國に捕はれルアンに於て火刑に處せられしも未だ二十に至らざる少女よし斯の如き義勇心の起りしどの扱ても如何ある教育の故にやト思はず大聲擧げたるを島野が聞き附け書齋に入來りて無言も静の顔と見つめたり

第十一章 (頌歌感と漏す作史の狀)中

静「嶋野サン貴郎の只今新聞社よりお歸宅もありましたので滲座りますか 島「拙者の歸宅したのとまれ貴卿の今何を云はれしや……お朋友でも御談論のあることかと來て見れんか一人言……静「エ、……島「エ、どの何んですか拙者もや一切解得ませんがどうお隠しあくても宜いでしよ……とうして貴卿の顔色と云ひ眼元と云へ何にか愁へることのあるのですか 静「何よと仰せなさいますかと思ふたら妾か愁顔でありますとかそれのどのでもない御推量……妾は今日學校より歸宅してからどう云ふ原因やら少しく氣が鬱ぎました故歴史でも見ましたら散じましようぞ存じて之れ此の佛國史を繕き閱讀した處で御坐りました……島「それで御顔色の悪しく又大きな聲を擧げられたと云ふ理由ですか……さもわれはあれ拙者のとうとは決して信じません 静「例へ信ぜんと仰せらるゝも妾よして今申た事が眞實なればまた外も申上様が御座りません 島「斯くもお質問申すよお隠しあらん是非なきことだか佛國史の何れの時代をお閱讀でしたか 静「今日に限

り斯くお疑のあるとは何故で御座いますか妾のジャンダーク女が佛國の危急を救へまし
 たる段を閱讀しましたので御坐りましたよ……鳥「貴卿が言葉を疑ぐると申すよのあらね
 ども貴卿の舉動も因れば他も深き原因のあること、夫れ故重ねてお尋ね申した譯で而
 して佛國史中のジャンダーク女の段をお閱讀になりしとな……貴卿が氣鬱を散じしめん
 が爲めに夫等を閱讀れると……却て氣鬱を増すので御坐りませんか……何せなれば歴
 史を閱讀で或の悲しみ或の喜び或は樂しみ或の傷ましめ國家將來を鑑みるは著者其人は
 勿論なれども看者其人の如何に因るものにして即ち貴卿が如き感覺敏き性質を以て閱讀
 れは滋々氣鬱を増さるゝ次第であります……故に氣を散じしめんが爲なればピアノでも
 和せらるゝ方がなまぬであります……静「無感覺なる妾です今此史書を閱讀まして
 一ト度ハ悲しみ一ト度ハ怒らしめ又思ひの種とありました……夫れ故今考へますれハ初
 めより閱讀をい方が宜しかつた様も存じられませ……されは仰せれ如くピアノに頼つて

氣と樂をましめましようか

ト二人は手を把り一ト間離れし奥座敷へと至りける

第十一章 (頌歌感を漏す佛史の狀)下

お静のピアノの律を正して聲爽かに

嗚呼惡みても尙余る

佛蘭西國のルイの王

限りあるべき命よも

限りあらざる身の欲か

暴逆無道の其行爲

民を苦しめ哭せしめ

○没後は大洪水と

遺す言葉もあらゝま

わらノぎとられし玉の緒も つなぎ止むるよすがなく

王位と共よ亡びける

實は將來の鑑なり

ト歌ひけれハ

島「拜聴々々如何ももイ十五世を題せられたる唱歌感心致しました… 静「否とよ深く考へましたもあらず今ピアノの音は心誘はれ偶然に發しましたることなれば律は合ませぬ拙作これも一時の笑艸島「笑草やら徒然草かは知らねども偶然の出来事之れ眞理とか言ひれし先哲もありません通リ今貴卿が偶然に發せられしと云ふその唱歌も所謂眞理は適ふて居て御坐いませんか… 静「妾が一時の口ずさまで御座りますれば眞理は適つて居るとか居ないとか學問的のお話しは今日止まして貴郎も何う吟ぜられまし及ばずながら妾がピアノを… 島「何う致して拙者がその様を六ヶ敷とが出来ましよろか… かし之れ何うでしよ律は合ひましようかな直し被下… とう云ふことです

月を佛蘭西巴里の府に

眺めあきたるナポレオン

雪を魯西亞れモスコ府

紅染めし其原因は

花と英京 倫敦よ

摘んものとの發心なり

斯かる過ちあるなれど

歐洲諸國を壓倒し

己のか治政の下置さ

大陽の出沒を管内よ

領せんものとの豪膽を

惹起したる英雄なり

その英雄の元の身も

佛蘭西國に一兵卒

懐き望むる帝王の

位も遂に昇り得て

竹帛垂るゝ雷名は

努めや心一つなり

ト島野がピアノを和して作れるナポレオン一世を題したる頌歌を聲朗に唱ふれハ

静「ヒヤ／＼誠まことな感服かんぷく致いたしました……如何いかも仰おほせの如ごとく人間心にんげんこころの向むかひ方かた一つで身みの浮う沈ちんと定さだむるもので坐ざりますね……時ときに島野しまのサン貴郎あなたか去年こぞの七月しちげつとやら師しのおん意中いぢゆうをものせられし頌歌しょうかを如何いかです合あ唱じやう致いたしましていとて 島「あれの眞まことは拙つたなく坐ざりますが
トピアノは二人ふたりの言葉ことばを揃あはせ

嗚呼あゝ思おもひばや世よの中なか

吹風ふかぜ寒さむく往年ゆくとしの

冬野ふゆのよとたく虫むしの音ねを

何なにと聞きけん人草ひとくさの

身みの毛けをぬらそ村雨むらさめや

むら雲くもの間まの日ひの本もとの

樹木きの紅葉もみぢの色いろそへて

いや／＼赤あかき赤心まごころの

益ます良ら猛夫たけをと名なも高たかき

□□□□の雨ふたうじ氏の

頭くまの上うへも降ふりかゝる

露つゆしも月つきの中なかのそら

露つゆしもならでまが神かみの

まがなとわざか斯かくばかり



圖 ルタラセ 嶽 繁 環 野 端

月ほと清き兩氏も

窓のあかりもおほろく

あやめもわかぬ獄屋まぞ

儘ならぬ身と繋れて

聞く悲しさや如何ばかり

鳥よ引かへ兩氏の

今日魁て海原を

彼の外國の道を踏み

頓て歸らんそが日よ

自由を保ち護らしめ

祈らむものと賢くも

黒きよ黒き鉄の

またかくろひて夜晝の

たち居寐起の自由さへ

うつゝの中よかりの音を

雲井はるかよ渡り來る

同じ思ひの友とちよ

遠く跨きて數多き

萬の事を見習ひて

吾かはらかよ天性の

國の榮を神かけて

旅の装へ整ふへ

笛の音高く石炭の

煙と俱々出る船よ

今や乗らむと思われし

身はいかなれば荒学もて

繋ぎ留られ晴なく

歎くもつらき冬の夜の

長き思ひのかり枕

肌吹風のいと寒く

病症の身を暖めむ

晝の日あしの早暮れて

師走の月もゆめこゝろ

疑解む日と待ど

えら梅の香は誘われて

啼く鳥の音は春來ぬと

國津太神と伏拜み

最も愛てたき蒼生よ

禮述終へ束の間も

疑晴む事待て

はや衣更着の月も過ぎ

彌生のそらの花曇り

未だ晴やらぬ身の上と

恨む風情の卯の花の

白きを光す月かげや

不如歸くくと告ぐ鳥の

音も朗く聞初て

開くあやめの色もなき

眞白よえろき花ありと

宣へ告られて元の身の

自由を持ち歸られし

水無月よ咲く富貴艸

其名の清く愛たしと

祝ふ親しき友とちと

袂を別ち健氣よも

素の願を遂んとて

先つ亞米利加よ志し

千尋の海を打渡り

已へ行かれし両氏の

末たのもしき大日本人か那

ト二人の言音に現ゆる、其樂しみも大陽の將よ西山よ没んとする時刻なれハピアノをしま
い各居間へと戻り其日と共暮したり

第十二章 (新紙人を歎と繫獄の報)上

茲の淺草大代地倉屋と云へる旅人宿奥の二階は三人の客人うちなる一人新聞を讀みながら

甲「イヤ〜大變な事が出来た……乙「なんだそんなよさのの……甲「騒が

ないでどうする此の様な事が出来て……丙「そんな騒ぐと佛獨の單亂でも開

ひたか……甲「なよ〜外國のことではないが此の新聞を讀み玉へ何んの事件だろう……

…乙「ドレ〜何んだ……

嶋野環氏の如何なる嫌疑も一昨夜突然警視は拘引せられたり

ト新聞は事項と讀んで大に驚き

乙「如何も云へる、通りの大事件何の嫌疑か知れぬが大方國事犯でもあろうか……

…丙「島野君が一昨夜拘引せられたと、それや國事犯の事件は相違なからう……島野君

と云へ先月であつたか向島の植半樓にて壯快なる辨を振つて演説せられ其中に有志者

の繫獄せらるゝと悼まれしか今、却て自身か悼まるゝ身となられまとい嗚呼形なき世の

中じや……甲「實に我々共は酒酌み交した、此間の事であつたが思ひは夢の様で……あ

る乙「何んもしろ聞き合したか宜うろから君の名前まで聞き合してくれ玉へ果してそ

うあら差入物とせねばならぬうら早く願む

ト云へければ一人の早速書翰を認め使を馳せて國友新聞社に居る友人のもとへ眞偽如何と

問合せよやれの使は直に歸り來て返書を差出し開封問も遅しと讀下し

甲「やつぱり新聞と同じ事……何んれ事件か未だ判然せざれども拘引の次第の眞實

なりと乙「いよ〜相違なければ今日のモー時間がなにか、是非ないが明日からでも差

入ませいりませしよ

ト話談交居る人々より此報を開きたるお靜の心は如何ぞや嘸くやしく傷ましく他人の想像

の及ぶ處よあらざらん

お静の毎朝新聞を閲讀畢りて學校へ行くを例とすれの今朝も今朝とて新聞の來ると遅しと待ち居れる折しも配達人が配布來れの取り上げ見るに殊更又圈点と附せる一項あれ何事ならんと讀下しハット驚くお静が舉動

静「何事あらんと讀んで見れの嶋野サンの拘引どの抑も何事であるか新聞よ一昨夜拘引と在るが……成程一昨日御出宅となりてよりお歸宅をき故如何せられし事やらと心の中は案事居りしと斗らざりき之れ此の凶報……マ一何事であらふか……新聞よ如何なる嫌疑よやとあれの未だ判然せざることなれと嶋野サンにして拘引なされる様な罪咎の決してなき筈去るおしても嫌疑とあらは國事犯の事で、もあらふか……」

ト一人言眼いろらし齒くいしばり腕さすりつ、嘆息し

静「若しも嶋野サンよして其事の心よありしならたつた一言なりとも妾よ告げ明かされてもよろしかつたらうよ……その言だよ無くして一人獄舎よ繋かれしと怨しいとも

お傷むしい……現よ一昨日までの此家よて起臥せられし嶋野サン自由なる談話や散步や食事も一處よあせしなん身あがら今の捕のれの身とあられしぞ口苦しけれア、お傷むしいこと……嘸や、籠の鳥なる憂き思ひ思ひせられておのすらんア、口苦しけれいたましい……夜毎寝られしかいまさの錦衣よあらねどさむからず日毎の食も甘きよあらねと鹿末ならざりしも今は寝夜具も寒さを凌ぐよ事足らそ食も鹿よして口よ入らぬでありましよ……ア、其は不自由の如何のかり

ト賤のをだまき線かひし川なを涙袖しぼり其處へばつたり打伏たりしも稍少時して

静「斯かる凶報の身の大事……茲よくよくなげくとも詮なきこと之れより早く此事と親類共よ告知なければならん……との云ふもれ、知らせるところが何んの役もも立たぬこと却て親類共の彼の獄舎をへ鬨かれあされたとでも申したら夫れこそ非人間様よ思ひなしその嶋野サンのお志しをも推量らず一概強並て云へいなたる、こともあらぬ

即ち身の不爲と云ふもの……しかま母上迄への傍通知申して置ましよう
ト一人思ひを取極め居れる折から下婢が持來る書狀ハ何様なるかと急ぎ見れの國友新聞社
より嶋野環の拘引せられたる次第の報なれハ尚静の尙も増す思ひ又今更の様泣き伏した
るこそ女丈夫なるお静も之れを情理なり情の感ずる處人々相異なると云ふべきも藝妓小花
も新聞の話しを聞きて感ざる様

第十二章 (新紙人を歎と繋獄は報)下

場所も名高き柳橋藝妓新道の中程に菱屋と云へる藝妓やあり内の姉妓ハ火鉢ももたれ切り
又新聞を讀みける折か
小花「姉ハン何んですとい今お讀みのハ……嶋野サンとやらが警視へ拘引られなされた
とかい……姉妓「何んだねーいきなりそんなことを……お前のそれを聞いてどうを云の
……小花「どうも云やーしませんはねーだがお聞き申た様なお名ゆへ」姉妓「ろんならお

方を何處でお聞き……小花「何處だづてい、じやありませんか……」姉妓「匿さないかつ
てよいわー匿さすよお言ナーナイ小花チャン早く……」小花「早くつてといやでそのと
……」姉妓「いやだなんのとおもはせぶりある……覚えてれいで……」小花「何よも匿しやし
ませんのねー真個ですもノー」姉妓「だからい、と云ふのサ……何んだつて小花チャンろ
んちよお鬱ぎ……」小花「アラ姉ハンいやなことづつかり……何よも鬱のまませんのねー
ト口よの言へど心の中よ思ふ様
小花「忘れもしないつぞや植半樓までお見掛け申したその時より斯かるお方をと思ひし
其日幸ひもそのお方の甚く酒よおさのりなされては介抱申た其とりよ言ふとしたがさ
もあらず責めてのお名を承り置たしと存じたあれを恥しいやら恐いやらでお聞申も致さ
ず又面會ととつた一言を名残もて其日を別れ申した後で帳場の若衆も聞いて見た
れの嶋野さんと慥か又聞さしが夫れより又の逢日の何つやらと待ちよ待つよもその甲斐

なく夜晝毎に客衆より呼ばるゝ度、若しや島野様でゐるまいかと座敷へ出ぬその前より胸の動搖を壓し静めようゝ座敷へ出て見れぬ人と思はれて思ふ方逢へもせで憂さ目を送る其つらさ今も今とて姉ハンが新聞讀れし其中島野様か拘引とありしか日頃慕ふる島野様の若しや其方方であるまいか若しもうなる其時の何様したらよからうやら最と案事られること

トいと羨ばれて居れる時しも表を通る二人伴聲高らかよ

甲「國友新聞社の島野君が拘引せられしとかな 乙「島野君の國事犯の嫌疑で、もあるか……僕先月で在つた植半樓まで懇親會の節見受たが夫れ何日の事であるか 甲「君の新聞を讀まないか一昨夜のことであつた

ト二人の話しを聞きつけて

小花「今表を通る人の話し島野様を植半樓まで見受たと……それで私イが思ひ焦る

島野様に違いないことさて何うしたら宜かろうか、嗚呼世の中月もむら雲花も嵐の例の通り自由にならない我身の上否島野様の身の上嘸くやしくお思召ことならん夫れよしても何んのお罪があつてのことか那のお方よしてよもや人よ背指とさ、れなさる様あことひなさりますまい

ト一人心よ問へつ答へつ涙よ咽び居れる其風情人の心よや解得らざりし

第十三章 (才子思を議す鉄窓の下)上

監獄の何の必要ありて設置するやと問ふ蓋し法律に觸れたる處の犯罪者をして戒め懲さんか爲め其犯罪者を繋留する場所なりと答んれみ去れの監獄の必要の社會は犯罪者なるもの生じて初めて起るものよして未だ社會は犯罪者の生ぜざるときに決して監獄の必要を來たさざるものとす然るゝ大觀すれ歐と云ひ米と云ひ將た亞と云ひ苟も治政を立て國と成す處として監獄を見ざるることなきと豈思ふて慨嘆の至りならずや然りと雖も社會

犯罪者の跡を絶ち監獄の無必要を來すと云ふべきこと、到底望む可からざることならん何
 とおれ、普ねく教育行われ、限なく道徳と識るに至らん、從て犯罪者も其數を減少し進んで
 の教育道徳の高尙なる黄金社會に至らん、全く犯罪者の跡を絶つことなしとせざるも其黄金
 社會たる幾世紀の後果して之れを接することを得可きや否斯る社會の將來現出するか如き
 こと、得てあるべからざれなり、夫れ然らば今日於て、不得止監獄として、長く法律の
 趣意を基き犯罪者と懲戒するに足るべき方法と論索者究して其改良を行わざる可からず若
 し監獄として其懲戒の法々々適せず、只犯罪者も苦對し痛を與ふるのみのこと、おれ、犯罪者
 の刑罰の如何と悟らず、再犯より益進んで數犯に至る處の大罪人と養成するに至らん、古諺に
 監獄の盜兒の學校なりと豈夫れ鑑みて鑑みざる可けんや
 而して其改良の點に至て、之れか説を爲すもの種々ありと雖も、先づ其監獄の位置をして懲
 戒の法々々適當するや否やを觀察せざる可からず、今我國他府縣所在の監獄位置は就て、暫
 らく措き東京府下にある處の監獄は就て以て之れと論せん、府下に鍛冶橋監獄、石川島監
 獄、市ヶ谷監獄、并小菅集治監の四ヶ所あり、其鍛冶橋監獄は未決監として、理論上監獄の名稱
 を附すべきもの、非らと其他の三ヶ所の既決監として之れ、即ち監獄なり、既決監も石川島
 市ヶ谷の兩監獄は輕罪囚より重罪囚をして留置するものとして、此兩監獄及未決監たる
 鍛冶橋監獄は東京府の管轄とす、又小菅集治監は其重罪囚中の男子として、徒刑處せられ
 たるもの、一時留閉し置く處として之れ、内務省の直轄とす

夫れ斯の如く三ヶ所の既決監たる其位置と指摘せん、石川島監獄は墨田川の河口、一小島の
 地形を或すと雖も、僅か一水と隔て、對岸は品川の妓樓軒を連らね、燭燈の光輝袖が浦に
 映じ、水は金波を流すかと疑われ、絃歌の聲は常に監内を響き、又市ヶ谷監獄は數町と出ずして
 内藤新宿の妓樓あり、又小菅集治監は特村野の中、設けありと雖も、千住の妓樓に接近し、絃

歌の響さの草葉を追ふて常は監内は傳へ止まず夫れ各所として何れも青樓は接近し絃歌の聲の囚人の耳朶と叩き心情を奪へ云るゝあらずや

斯かる監獄の位置にして幽閉繋留せらるゝ處の囚人如何は眞愼悔悟の情を惹起さんと欲するも常は絃歌の爲めは遮ざられ心奪われ情動き却て一事の罪惡心を發生して終は破獄等と企つての恐れを來すこと無しと斷言するを得ざるなり

然らば監獄の位置として何地を擇まば夫れ等の弊害を除き從て好結果を得可きや他なし人里遠き音信も容易は爲すを得可からざる程の遊地に設けたらんゝ潺々たる溪水の流れの音と聞きては坐る斷腸の思と惹起し颯々たる梢をならす松風の音を聞ては妻子父母の慈愛心を惹起し初めて前非を悟り悔ては獄則を謹守し一向放免の日を待つゝ至らん斯くなりてこそ法律は適へ良く犯罪者を懲戒する方法を得るものと謂ふ可きなり之れ即ち監獄改良の第一とす

第十三章 (才子思を議す鉄窓の下) 中

又轉じて未決監繋留の所置をも改良せざる可からず前は云ひる如く鍛冶橋監獄の即ち未決監にして裡は常事犯とすべきものもあらん國事犯とすべきものもあらん又純粹正直の無罪者となるべきものもあらん然るゝ強盜奪財者の如き破廉恥極まる處の惡人等と常は品行を重んじ身を高尚の位置に備ふる處の人にして偶思想言論の爲め或は筆硯の爲めは嫌疑を受け留置せらるゝ人々と坐を列ね席と同ふするか如きは法律上の眼よりして之れと云は一般無罪者の推測を以て彼我同室は繋留し逃走の憂を拒がるゝとい雖も在監人中奸智も猛たるものゝ以て他人は惡計を教へ又身分と重んぢる人ゝ對しては後日社會に在て交際の榮を汚すこと無とせざれは之れが改良の方法と施さざるへからず茲は鳥野環は國事犯の嫌疑を受けて其未決監は繋がれ盜兒輩と室と同じうし日夜鉄窓の下は呻吟し苦楚を嘗め唯鬱々として昨日と過ぎ今日と去り早や二月を監内は經過しその間とて見舞れ物の絶え間

なく日々其意を慰め居られしが

島「如何なれば罪咎もあさ身を嫌疑と云ひ斯くも長らく繋檻に附せらるゝことかは……
 此間も豫審廷まで取調を受けず其時も犯罪の證據とて一もわらざるゝ有罪者の推測
 を下され斯かる爆發物取締罰則違反の終結をせられしと……ア、是非もなきこと此上
 は公判廷に於て公明の裁判を受けるより致方ないが……若し不幸にして有罪の判決を得
 らるときは彼の石川島監獄へ廻され辛苦を受けねばならぬがよもや左るべき道理のある
 まい……時に日頃差入物せらるゝ中、金子花と名號て差入られるものがあるが誰れなる
 ことや……更し聞いたことのない姓名とてして女の名前まで……ア、解得つた花と云
 ひは小花のことあらん小花と云ひは何やらであつたが植半樓まで懇親會の節介抱して
 れた柳橋の藝妓まで其後禮へ行こうと思ふて居たなれど種々ある要事の爲め取紛れ延引
 したる其折うら今も此始末……若しも金子花といふ此小花が事であつたなら却て恩に恩と



鳴野深出獄祝宴之圖

重ねて受くると云ふものなるが何よまろ親切の人もあるもので實に難有いこと……
ト胸のうちよて兎や角と思ひ廻して夜も早や深夜に至りたり

第十三章 (才子思を議す鎮窓の下)

既往將來現在の身の始末も夜中の一層物案じ

鳥 「かへすくも愚痴なれを思へん思ふ程……嗚呼怨むべき哉天よく我訴ふる處を聽け
我れの少壯よして及はずながら社會の爲め盡すあるの計ある身をして悲むべし斯かる
獄舎は幽閉し罪無くして見る配處の月つきより清き我身と愴むべきかな嫌疑の重く晴る
其日の何日なるか……天良く我訴ふ處と聽け我身よ斯かる苦痛を與ふるあらん寧ろ我れ
よ死と與へよ……天否我れよ死を與ふるの權力あらざらん己よ權力をく又苦痛と與ふる
の權力ありや……否無罪純白たる我身に天苦痛と與ふるの權力を決してあるべき道理わ
らん……已よ此道理なければ今此身として速に苦痛の域を脱せしめ元の自由よ復せしめ

よ……天靈あつゝの我言を納れ

ト云へつゝ又もや

島「我れの斯く不自由の身となりしより其不在中の定めし新聞社よての事不埒も流れ怠慢のみよて必ず世間も聲譽を損したることならん……とうでもあらふなら困つたこと……ト日頃より盡力し居れる新聞社の盛衰如何も就いての思ひを疲らし又も疲れて臥すといなし寝ねけれの思ひがけなきお静が言葉

静「島野様貴郎の何か犯せる罪ありて人もいやがる此獄舎へ……獄舎へ繋がれおされます様なことと何せよ妾も一言も言ひ聞かしていただくさりませぬか……怨めしい……他人の様な其しうち……といふものゝ島野様……今此の愚痴の云いますまいが……兼てれ企望を果さず……お體体障る其時……何様致たら宜かろうやと妾のなげさの如何ばかり……察してくだされかよわき妾を……何うぞ無罪の言渡を受けて無事なるお顔をバ

早やく拜せんものと朝な夕な念じ居ます心根を……御身が切なる苦しみと共忘れぬ……恙なく御出獄をバ待ちます……

トよゝと泣き入るお静の聲はハツト驚き目を覺まし見ればお静の影もなければ

島「ア、今のの夢であつたら

ト尙も四邊と見れば暗黒よりすかに見ゆる角燈の光り近く聞こゆる同檻人の麝の音遠く聞こゆる警官の履音高く巡衛せり

第十四章 (佳人任を聴と新紙社務)上

村田お静の小梅なる別荘に一人鬱々と閉じ籠り一向島野環の身の上と案事わすらい居れる折から門は郵便の呼ぶ聲あり下婢は取次持來れば何様あると表紙見れば正しく自分に宛たる書翰もえて其差出人は松田三郎とありければお静はハツト膝を打ち

静「曾て嶋野さんよりお聞きをし居し松田さん……何用ありて妾も書翰をよこされし

か

ト封メ切テ讀下す文言よ

久敷馳問の禮を欠き候段平は御海容可被下候云々自分義先達より他縣へ出張致
 居候て漸く一昨々日歸宅致候處直は友人より聞取候は島野君の國事犯嫌疑事
 件にて御拘留之御身と承り大に驚入候實は御不幸の御事と奉存候依て昨日
 自身監獄所へ出頭仕り御見舞申候處身体御健康の御事は御坐候之れ御不幸
 中の幸と申候より外無之候云々乍併世は盡すあるの士は特は障碍を受らるゝは
 常なれば貴卿幸は意と重くせらるゝことなき様願上候云々

トお静の一句讀む毎は涙の種は彌増り両手を拱さホット息つき

静「御書翰の如く先哲も云はれ怒濤嶮峻なる海山を跋渉するの苦を受けざれは好結果
 を得難しとの疾く承知するもの、あきらめ難き現場のお苦しみ夫れは就ても南州翁が才

子元來多過事と吟ぜられしことを思ひ出さるゝ我夫は、否島野様、妾の口よりして才
 子と云ひるべき場は、いあらねども何かの過事でもありしと見へ此頃聞けの豫審も終結
 せられしとのゆこと之ふなるからの有罪者なりとの推測を下されしものなれは只公判廷
 の至當なる宣告あるを待つべきのみ、夫れもしても島野様御身何卒御健全でおいで被
 下ませ、左様此お書翰にも書いてよこされた御健全であるとのこと……

ト尙も松田より來りし書翰の後の文句を讀終らばやと燈火を掻立んと面上げれは孤燈は影
 又髪延び面瘦せ最と色青ざめたる一己の士の立すめるわれは静の夫れと驚きたりしも胸
 なでわろし氣をうち附け窺ひ見るよこれちん疑方なき島野環なれは静の一聲あわたし
 く

静「イヤ貴郎の島野様、まづの涉無事で、なつかしゆるは坐りました
 トすがりつけば島野のお静と振放ち

島「貴卿お静どの卑強なり、貴卿の常は女丈夫を以て身に任じ居ながら自身環が如き者か一時疑獄の難を被むるとして左まで歎かるゝことか、いゝ、卑強なり
ト思ひ掛けなき島野か言にお静は何んと言葉も泣く計り其場へドット平伏したり

第十四章 (佳人任を聴と新紙の務)中

平伏したるお静の稍少時して起直り

静「夫れい果して貴郎か信實心のお言葉か、歎く妾と卑強といゝ、慕ふ妾を女々しきとや、島野様貴郎は情理と云へるをお忘却れか、お忘却ならん是非かないがよも貴郎のお忘却のいさんものと存じます、然るも貴郎の今のお言葉……どの解得ませぬ
貴郎は永な月日を獄舎の中で御難澁御窮困あそばして、夫れと妾の歎かいで何んとしてしよう、慕わいで何んとしてしよう、貴郎の御難義あそばすと歡ぶもの抑此の世のありませぬ、否世にあるのつた反對主義を抱ける其人々、否人いならず蓄生

奴共でありませよう、今や貴郎の洩出獄あそばされては無事のお顔を拜するよ……何とてお顔を背け振附らるゝや

トお静は又もすがり附けは無情や島野の再び振切り言葉改め云へる様

嶋「貴卿の環の不肖をも顧られず斯く慕われ疑獄は難を歎かるゝ其は心情の一寸膽も冥じ決して忘るゝところあらず然れども今貴卿は告ぐ可きこと、囑托すべきことの二事あり貴卿乞ふ我言を納れられよ、其告ぐ可きこと、は他あらず我今此處に來たれども公明の裁判を得て出獄したるよあらず其裁判だも何日あることやら今より豫め知るよ由なきこととして未だ青天白日の身となることを得ず尙獄裡に繋留せられ居る處貴卿は對し強て囑托せざるべからざる一事あるか爲め忍んで茲に來りたる次第なれば貴卿之れを諒焉、又其囑托すべき一事と貴卿も曾て知らるゝ我管理せし國友新聞社と關とることなり即ち自身が不在中は貴卿の其管理の責を負ひ自身に代り充分に思想と吐露し

以て國友新聞の名聲と陷すことなからんことを、親愛なる貴卿よ幸ひ其責と全ふし
自心が無事と出獄するの日を待たれんことを……

トますます小聲なるかと思れば傍の燈火の將滅など去て明るく又明くならんとし
て滅なんどとる有様と今まで此處とありトありし島野が身体何處ともなく失せけ
れとお静はなんどせんすべも只茫然と打萎れ暫時思案と暮れ居たれ初めて覺めし心附き

静「ヤ今迄居られし島野様と見しに全く現でありしか、幼しのまだ眠の前と見る如く
ア、一したわしい……」

ト云ひつゝお静の心取り直し

静「現どの云ひありくと島野様がお言葉と國友新聞社の管理の任を妾と托する旨と仰
せられし何んとしても氣と掛ることしかしながら社に多くの記者のお入すことなれ
ば妾が其處と立入りて管理とるのも嗚呼がましくと云ふもの、島野様の滲不在中の夫



圖之ル不航渡ニ國英環野嶋

れとのなしと怠り勝もなるならば新聞社の名聲と共に嶋野様のお名も關ることなれ
妾の今島野様より明か其囑托のなさもせよ及のすながら微力を尽し其名聲をおとさ
るる方法を計らん

ト健げなるお静の其後の日國友新聞社に至り社員と共に協議して己の其管理の任を負担
し毎日出社することゝのなりぬ

第十四章 (佳人任と聽す新紙の務)下

女ながらもお静の毎日出社して萬事萬端に注意し良くろの管理の任を盡し社員も共に勉強
止まざれば益々降盛は趣々今の新聞中最も其名と轟かしめたるも道理こそ該新聞たるや素
より直論正義長く實利に基き實際に適し論すべきもの他は一步も譲らず充分に之れを論
じ又採るべきの説あらは之れと賛し採るべからざるの避説あらは飽まで之れと擯し徒ら
意を曲げて世人の歡心を求めず又上は諂々せず過激疎暴は流れず又因循姑息は陥らば所謂

不偏不黨獨立主義を以てるか故なりされぬ静の多端なる新聞事務と管理せしより既に
壹月と経過すれど島野環の事件の其結果如何を得ざるより最と心配を煩ひし居たこそ之れ
ぞ又理なりし

第十五章 (晴寃志を慰す歐米の花)上

嶋野環の嫌疑を受け拘引せられしより焉と經し兎と過ぎて早や三ヶ月を獄中と空しく送り
漸く今日の公判開廷よりありければ島野環の手錠腰繩にて監舎より索れ豫て辨護を依頼し置
し代言士と共に法廷に臨め傍聴人の黒山を成し我前に席に就かんものと喧騒止まず戸扉
を破りて入るとするものあれは玻璃障子を毀ちて踰入らんとするもあり警官の制する言
葉も聽かばこそ動や〜おし入り今の全く余地もなく後より來る傍聴人は空しく歸宅する
程島野環の公判何れ注目したり被告人たる島野環の身体拘束を脱して控へ居れり掛官
一同着席立禮畢りて檢察官の公訴狀を書記をして朗讀せしめられ爆發物取締違犯被告事件

の事實を尋問せられ夫れより着々歩を進めて証據調より事實の辨論法律の適用如何と就て
檢察官と辨護人の論駁止まず檢察官の有罪ありと論告し辨護人の無罪なりとの論決よて其
日は閉廷せられ明日其裁判宣告の旨を告られたるより今日の如何なる裁判ならんと思ふ島
野が心より静れ思ひ分裂ばかり

静「昨日の公判の模様如何ならんと島野様の目を忍び人目と掛るぬ風姿をして傍聴は往
きしが檢察官の論告に一切り又有罪なりと主張せられしが余もや有罪の宣告のある道理
はなからふ……斯く思ふ妾の身の欲をは知られとも嶋野様をして有罪者ありとせんよ
他も充分なる事實證據なからぬなと考へらるゝが昨日論せられし事實證據たるや
一も爆發物取締違犯の罪と構成するの原素見るべきものなく更と關係のなきものなり若
し夫れ等にも關らず有罪ありとの決斷せらるゝこともあらぬ法律の徒らに屬し其効力を
見ること能はざれぬ今日の必無罪の宣告あるあらんなん……なよし早く傍聴に參らん

ト胸又問へ口又答へつ裁判所へ至り傍聴席に臨んで宣告如何と片唾を呑んで聴き居れハ鳥野環ハ無罪にして放免するとの言渡ありたるより其喜びの限なく今却て嬉し涙の一車はつとり濡す袂みて顔を蔽へつハ人々と共々廷外へ出んとする後より鳥野環ハ拘束の身の今全く自由となりて同じく廷外へ出んとするより斗らずお静と顔見合せ

鳥「イヤお静どの長らくの間御心配と煩しまして……今日幸ひは青天白日の身となりましたゆへ安心して被下……」静「仰せの如く公明の裁判を得られ汚無事なる貴顔と拜とるハ何よりの欣喜で汚座りませす

ト余りの嬉さハ鳥野の傍へ身を寄せんとせしが人目の關を如何せむと顔赤らめる其折から人々呼べハるやう 人々「自由萬歳鳥野君萬歳

ト歡喜の聲を受けながら例規るればと一たん鳥野ハ監舎へ廻され手續を経て數多迎ひの人々と共々宅へと歸りたり

第十五章 (晴冤志を慰す歐米の花)中

夫れより二三日を経たれば鳥野が在監中見舞ハれ或は物品を差入れられたる多くの人々を招きて一禮述んと柳橋なる川長樓ハ酒宴を開き其人々を招き厚く謝義を陳べて散會したりしか此日客の内ハ金子花とて即ち藝妓小花の居れるをお静ハ見認め

静「かんみはお花さまで御坐りませんか

ト小花はお静ハ言葉を掛けられ大ハ驚き

小花「ハイ左様で御坐りませとさう仰せられますはお静様で御坐りましたか 静「如何にも

左様で御坐りまして久敷御面會も不致先づ御無事でお愛出とう御坐ります 小花「難有う

御坐りますして自分の無事より鳥野様の御無事で御坐りしましたが何よりお愛出度御坐ります 静「鳥野様も御無事で御出獄あそばして實ハ歡はしきことで御坐ります……而してお聞中せはかんみハ鳥野様の御在監中毎々御見舞被下たる趣まことハ難有う御坐りまし

トお静の言葉を聞いて小花は獨り思ひ廻す様

小花

「只今お静様の言葉の様子をお聞申せば日頃慕ふる島野様との特は御懇親の御模様

……若しもそうなる其時の我思ふ望み叶はざるのみならずお静様の貴き御身分自分の賤

きし今の業實に口苦しきこと

ト思へどそれと口よの言はず

小花

「何様致しまして其は禮よの及びませんこと

ト二人の話を爲し居る傍へ島野が來りて小花に對し在監中見舞はれたる禮義を述べ夫れより植半樓まで介抱を受けし次第を謝し畢て云へる様

島

「時よふんみのお静どのと御懇意なので御座りますか 小花「お恥かしゆうは座ります

か元のお静で座りましたが今のお傍も參られませぬお静様の御身の上「お花様の

何を云へるゝことやら妾か身の上とて高位を占めたるを云ふよのあらずよし占めたりと

するもは朋友でありしあれの何迄も御交際をせねばありませんでしようが左様は座り

ますれの妾か身分たる何んの位置も立ぬことよふんみより其交際と疎みせらるゝこと

か……夫れのもあれ久敷は面會を致さざりしよ斗ら老今日此席で御目も掛るとの御

縁の絶へぬことで座ります 島「傍両女の元は朋友で座りますと……夫れは誠不

思議な縁で座ります時よ未だ種々話し申上たくあれど今日の何んみしろ數多の人

中でも御座りますし又忙しゆうは座りますれの後日緩々御話し申しまよう

ト云ひつゝ島野は其處と立て往けはお静も一禮告て元の席へと往きよけれの小花の直様數

多の人々に謝して歸宅したりしが島野とお静との其交際の親密なるより初めて兼て戀慕へ

居し心の斷然翻て今は全く島野並にお静の風彩を慕ふことゝはなりぬ

小花の風彩と慕ふ心の彌増り日々營業の其間には新聞雜誌と讀み好んで論說など眼と注ぎしより人と交りての新聞上れ話しも出來得可き様になりしかば誰れ云ふとなく新聞藝妓と名號られ多くの客衆の最負を受くるより徒らに遊ぶ間とてあかりし時嶋野より突然郵便の來たれば何事ならんと開き讀めり島野の急に洋行するとの報なれり名残の惜くも詮方なく返書を差出し已れの島野の奨励に依て増々勉強し日を送りて島野が歸朝を待ち居れる

茲に島野環は兼て望むるところの歐米諸國を漫遊し彼の長處を學び得んと健げよも其準備を整ひる中よもお静も奔走して多くの資金を供しお静自から國友新聞社の管理の任を負担し又お静との婚姻の歸朝の後即ち明治二十三年の曉之れと行はんことを再び約して島野の凜笛と共に出る船に乗り黒烟跡残して先づ英國に向へ出發したりしよりお静は只管島野か恙なく歸朝の程と楽しく待ち居れる實に將來望みと属すべき才子佳人なりとす

芳草春の曙畢

版權免許
 明治廿年四月廿二日
 發兌同
 五同年

著者

福井縣平民

夏目助太郎

東京淺草區新片町三番地
 好見祐次方寄留

出版人

東京府平民

秋元房治郎

淺草區橋場町十八番地

專

正文堂

東京府平民

朝野文三郎

京橋區南鞆町

賣

幹香堂

同

杉本七百丸

日本橋區大傳馬町二丁目

人

明治書房

同

東生鍊五郎

同區通鹽町八番地

東 京 賣 捌 書 肆

兔	辻	鶴	上田	自	鈴木	榑	中	開	博	小林
屋	岡	聲	屋	由	喜右衛門	原友吉	外	成	文	喜右衛門
誠	助	社	榮三郎	堂			堂	堂	閣	

東 京 賣 捌 書 肆

春	大倉	博	山口	水	文	內	鈴木	野	丸	叢
陽	孫兵衛	聞	屋藤兵衛	野	盛		木金二郎	村銀二郎	家善七書店	書
堂	衛	社		幸	堂	藤				閣

TAKAO
BOOKSELLER
Osaka

2

3

4

1461